

第4章

「帯広の森」を未来へつなぐ



第1節 帯広の森50周年記念事業

記念事業及び実行委員会

帯広市 みどりの課

事業目的

帯広の森は、百年の大計で森づくりに取り組んでおり、令和6年に造成開始から50年を迎える。この大きな節目に、市民協働による実行委員会方式で記念事業を実施し、半世紀に及ぶこれまでの取り組みや森の成長を振り返り、市民の身近な憩いや安らぎの場等としての帯広の森の価値や魅力を、次の世代に引き継ぐことを目的とする。

事業コンセプト

「過去の軌跡・現状把握・未来へつなぐ」をコンセプトとし、それぞれの記念事業において、半世紀の軌跡（まちづくりと帯広の森）、帯広の森の今（植生・整備・利活用）、次世代へ引き継ぐ（森とまちづくりの思い）を意識した事業内容としている。

事業内容

実行委員会実施事業

記念ロゴマーク

フォトコンテスト

記念植樹・森づくりの集い

シンポジウム

絵本作成（漫画冊子・写真絵本）

記念誌

帯広市実施事業

高校生フォトコンテスト

帯広市共通封筒 PR 広告掲載

記念ホームページ

帯広の森展示キャラバン（小学校・義務教育学校）

YouTube 動画作成

帯広の森に関するアンケート

広報おびひろ特集記事

実行委員会名簿

役職名	氏名	所属団体等
顧問	高橋 猛文	元市民植樹祭実行委員長
顧問	林 光繁	元市民育樹祭実行委員長
委員長	三日市則昭	帯広市緑化審議会
副委員長	磯野 照弘	森の回廊@十勝
副委員長	澁谷 洋一	元植樹祭実行委員会
	赤嶺太紀子	帯広市 都市環境デザイン委員会
	伊藤 育子	エゾリスの会
	今村 江穂	NPO 法人 ぶれいおん・とかち
	小原 和弘	帯広の森サポーターの会
	清水 美晴	国際ソロプチミスト帯広（帯広市緑化審議会）
	橋枝 篤志	帯広商工会議所 参与
	畠山八重子	元森の少年隊指導委員会
	山田 英和	元植樹祭実行委員会
	大熊 勲	みどりと花のセンター
	日月 伸	帯広の森指定管理者
	宮崎 直美	帯広畜産大学 助教
	黒野 正博	帯広市 みどりの課長
監査	藤生 浩史	一般財団法人 日本森林林業振興会 札幌支部帯広支所
監査	馬淵 征雄	報徳会

実行委員会会議開催内容等

令和5年2月9日

設立準備委員会及び実行委員会立ち上げ

令和5年2月9日～令和6年6月7日

実行委員会 計7回開催

令和5年3月24日～令和6年3月21日

企画運営委員会 計7回開催

令和5年8月28日～

各記念事業ごとにグループ会議を実施

記念ロゴマーク

事業概要

制 作 日	令和 6 年 2 月 20 日
制 作 者	デザイン工房・金澤 代表 金澤 和彦
制作目的	帯広の森の魅力や周年事業をより広く発信し、様々な周年事業の機運を高めること

イメージ

- 市民の手で作られている帯広の森の特性を表現している。
- 子どもから大人までわかりやすく、親しみやすいもの。
- 一体感のあるデザインとし、帯広の地域性、帯広の森の歴史や豊かさ、帯広の森の思いを次世代につないでいく。
- ロゴ単体と 50 周年併記、日本語表記と英語表記の複数パターンを制作。

要 素

- ロゴマーク中央の手は、市民の手で作られていることを表現し、大きな手(大人)と小さな手(子ども)が幹を表現している。
- 手を囲み配置されているものは左から、エゾリス、ヤマモミジ、ミドリシジミ、カシワ、オオバナノエンレイソウ、ゴジュウカラ、ドングリであり、すべて帯広の森を代表する動植物である。
- 1975～∞は、造成開始(1975年)からこれまでつないできた森づくりの思いが、これから先もずっとつながっていくことを表現している

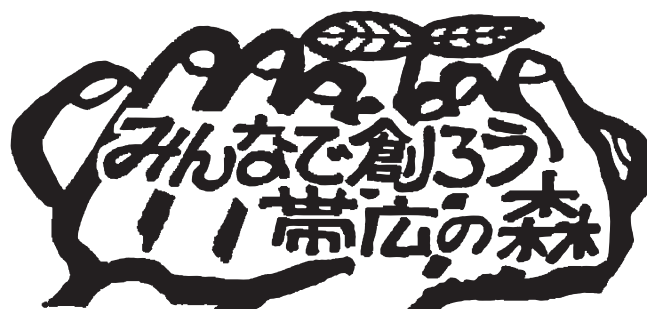


(参考)

令和 6 年度帯広市共通封筒に掲載



これまで使用してきているロゴマーク



フォトコンテスト

事業概要

〈周知チラシ〉



事業目的

フォトコンテストをきっかけに帯広の森を訪れ、帯広の森を知ってもらうことや利活用のきっかけづくりとなること。

募集イメージ

テーマは「あなたにとって帯広の森とは」であり、撮影者それぞれが感じる帯広の森の魅力を撮影してもらえるものとした。

また、募集期間以前の写真でも可とし、帯広の森の歴史が感じられる写真も募集したところ、当時の植樹祭の写真などの応募があった。

応募総数	206 作品
うち受賞作品	24 作品
・最優秀賞	1 作品
・優秀賞	3 作品
・優良賞	20 作品
(帯広の森へのいざないに掲載)	

展示会

日 付：令和6年9月27日～令和6年10月3日

場 所：とかちプラザ1階 アトリウム

内 容：令和6年9月29日開催のシンポジウムに合わせて、森づくり活動団体に関するパネルや帯広の森歴史パネルとともに、帯広の森フォトコンテスト及び帯広の森高校生フォトコンテストの受賞作品を展示した。



9月29日 展示会の様子

帯広の森高校生フォトコンテスト（参考）

募集期間	令和5年8月1日～令和5年11月15日
対 象 者	十勝管内の高等学校に在籍する生徒
応募部門	森の風景・生き物部門、人物部門
事業目的	帯広の森50周年記念事業フォトコンテストの先行事業として、同様の事業目的をもって実施したもの。
応募総数	54 作品
展 示 会	令和6年2月7日～令和6年4月11日 公共施設等8か所で実施

記念植樹・森づくりの集い

事業概要

実施日	令和6年5月19日（日）
参加者	総勢：約 100 名 記念植樹：高橋幹夫元市長 砂川敏文前市長 米沢則寿市長 森の里小学校児童 3 名 大空学園義務教育学校生徒 4 名 森づくりの集い：植樹活動 28 名 チョウセンゴヨウ抜き 30 名 （森づくりの集いサポート） 帯広の森 50 周年記念事業実行委員会 同会事務局（帯広市みどりの課） 森づくり活動団体メンバー 十勝造園緑化建設業協議会 ※その他一般見学者など

事業目的

記念事業の軌跡を帯広の森に残し、森づくりやまちづくりの思いを未来へつなぐとともに、記念植樹をきっかけに、市民が帯広の森を知り訪れる機会となること。

会場図



当日の様子

当日は快晴で、最高気温が 29.5℃ と 5 月の平均気温よりも 15℃ 以上高い絶好のコンディションの中で、認定 NPO 法人子どもと文化のひろば ぶれいおん・とかち主催の「森のこどもらんど」も同日に開催しており、帯広の森・はぐくむ周辺は朝から多数の来場者が訪れていた。

記念植樹は、大勢の参加者に見守られながら、高さ約 3 メートルのハルニレを 1 本植樹した。



記念植樹参加者

記念植樹後、森づくりの集いを植樹活動とチョウセンゴヨウ抜きに分かれて実施し、植樹活動では親子で参加している方などが、帯広の森にあるカシワやコブシ、ヤチダモなど 10 種類の苗木を植樹したほか、チョウセンゴヨウ抜きでは昭和 55 年植樹区エリア西側道路沿いに自生しているチョウセンゴヨウ（外来種）の稚樹を抜いた。

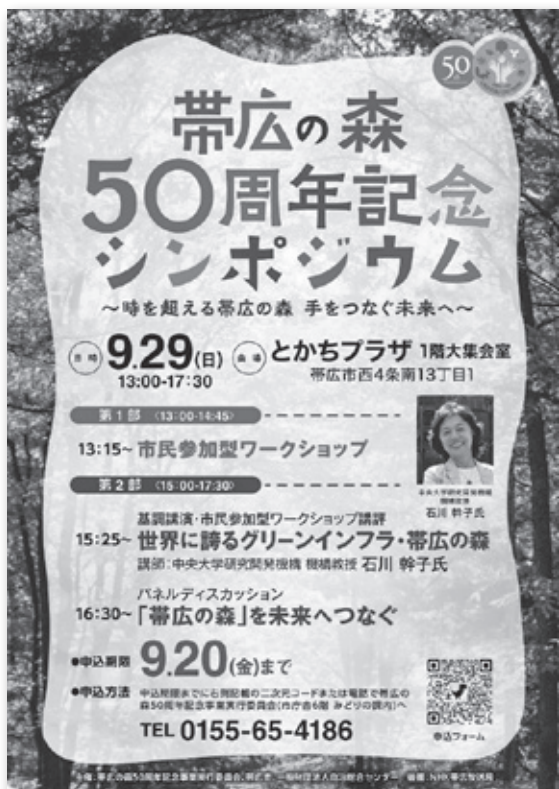


全体集合写真

帯広の森 50 周年記念シンポジウム

事業概要

〈周知チラシ〉



開催日時	令和 6 年 9 月 29 日 (日) 13:00～17:30
開催場所	とかちプラザ 1 階 大集会室
参加者数	89 人 (うちワークショップ 23 人)

事業目的

シンポジウムを通じて、50 年の帯広の森づくりを振り返り、将来の帯広の森の姿や利活用のあり方などについて考えることで、市民の森づくりへの参加意識を高める。

市民参加型ワークショップ

13:05～報告、ワークショップ説明

- 日月委員から、帯広市の歴史、帯広の森の成り立ち、現在の帯広の森に関する内容の報告及びワークショップについて説明

13:25～市民参加型ワークショップ

テーマ「自分ごとワークショップ」

帯広の森が造られた歴史や文化、50 年に至るあらゆるプロセス、帯広の森が持つポテンシャルなど、帯広市民として貴重な財産である帯広の森を理解すること、そして市民の生活の一部となりうる可能性を、一人ひとりが自分ごととして考え、意見を引き出し、この先の帯広の森の目指すべき姿を会場全体で考える場となるよう実施した。

グループごとに、①アイスブレイク、②自己紹介、③帯広の森の好きなところ、嫌いなところ、④今から 50 年後、造成開始から 100 年を迎える「帯広の森」に、「何があれば」あるいは「何ができるようになれば」みんなが幸せか、について意見を出し、発表内容を取りまとめた。

(グループごとの内容は、P139～142 参照)

また、一般参加者からも意見を聴取するため、会場内に上記④と同じテーマでホワイトボードを設置した。

15:05～ワークショップ発表

- 4 グループそれぞれが考えた内容を発表



基調講演

15:25～基調講演、ワークショップ講評

「世界に誇るグリーンインフラ・帯広の森」と題して、中央大学研究開発機構・機構教授 東京大学名誉教授 石川幹子氏による基調講演と、市民参加型ワークショップに対する講評を実施した。

(講演内容は、P143～156 参照)

パネルディスカッション

16:30～パネルディスカッション

[コーディネーター]

山田 英和氏

(帯広の森 50 周年記念事業実行委員会)

[パネラー]

石川 幹子氏

金清 典広氏

(一般社団法人ランドスケープコンサルタンツ協会 会長

高野ランドスケーププランニング株式会社 代表取締役)

今村 江穂氏

(認定 NPO 法人子どもと文化のひろば ぷれいおん・とかち 理事長)

「帯広の森を未来へつなぐ」をテーマに、これからの帯広の森を考えるパネルディスカッションを実施した。

(ディスカッション内容は、P157～165 参照)



ワークショップ、パネルディスカッション等参加者集合写真



関連事業

開催期間	令和6年9月27日～令和6年10月3日
開催場所	とかちプラザ1階 アトリウム
開催内容	①帯広の森に関する展示 ・歴史パネル、巨大航空写真 ②R5.R6 フォトコンテストの展示 ③木のおもちゃふれあいコーナー ・ポテトイ、からっく、木のプール ・木育に関する展示 ※十勝総合振興局林務課協力 ・「帯広の森」の木材を使ったカスタネット作成体験 ④森づくり活動団体に関する展示 ・活動、イベントの周知 ・森づくり活動団体パネル展示
来場者数	342人(アトリウム延べ人数) 24人(カスタネット作成体験)



ワークショップ第1グループ

参加者一覧

山川 晋示、北久保 希愛、能登 綾香、
佐々木 梨江、磯野 照弘、田中 裕史、
井口 百合香、赤嶺 太紀子（ファシリテーター）



グループ内での議論について

まずは帯広の森のいいところと残念なところを書き出していただきました。いいところは「まちに近い」「広く、自然が豊かで生き物がたくさん」といった声の一方で課題・残念なところは「森を知らない人が多い」「使われていない」という声が圧倒的に多くでした。街に近い森がいいところなのに、バスがなく車でしか行けない。という利用上の課題が明確になりました。

この意見を踏まえて、50年後の「帯広の森」に、「何があれば」あるいは「何ができるようになれば」みんなが幸せか意見を出し合い、大きく3つの課題と対策を書き出しました。

- 1) 知られていない、使われていないを解消するために、情報発信の強化、学校利用の促進、ネットも使用した新しいアプリの開発など。
- 2) より多くの人が行きやすくなるように「散策路入り口」のようなバス停を整備したり、十勝らしさも反映して馬車で行けると楽しい。
- 3) 森のよさをもっと高め、広めるための活動として、自然活動と文化的活動を両方行うことや、自然度を高め本来の在来植生に近づけていくこと。

グループワークのタイトルは「来てみたくなる森」としました。これからたくさんの人に利用される帯広の森となること、市民だけではなく旅行

者も訪れるような帯広のアイコンとして愛される場所になってほしいという思いを込めています。



ファシリテーター感想

とても個性的なアイデアが多数生まれ、50年後の帯広の森の姿をわくわくして想像することができました。特に「森へのアクセス」については行きやすさだけではなく馬を用いる十勝らしい文化を織り交ぜる発想は、地域のアイデンティティに根差しとても魅力的なアイデアです。また、「もっと森と積極的に関われたらいいのに」という率直な欲求から「手のひらに乗る分は採っても良い」という森のおきてという発想は市民一人一人が森を楽しむことと森の生命力を共存させる素敵な意見でした。ワークを通じて積極的に森と関わる十勝・帯広らしい新たな文化の創造、そこでいきいきと森を楽しむ人々の姿、人々の活動から一層多様で豊かに育つ自然環境というポジティブな関係性。その上に愛される100年の帯広の森の姿をグループの皆さんと語り合えたことに感謝いたします。このアイデアが1日で終わらず、新たな交流や活動のきっかけとなれるよう、シンポジウムに関わった人間として取り組んでいきます。

ワークショップ第2グループ

参加者一覧

山越 芽依、関口 翔太、阿部 真由子、
永守 祥嗣、久保 美香、
宮崎 直美（ファシリテーター）



グループ内での議論について

最初に「帯広の森の好きなところ」について、自由に意見を出し合った。森で生き物に出会える驚きや楽しさなどが挙げられた。次に、「森の嫌いなところ／課題」について、意見を出した。自宅から遠くてアクセスしづらいこと、森を知らない人が多くて市民に浸透していないことなどが挙げられた。これらを踏まえ、50年後の帯広の森に「何があれば」あるいは「何ができるようになれば」皆が幸せかについて考えた。森では生き物と出会い、見るだけでなく、虫の声が聞こえるなど四季を感じられる自然が最大の魅力であることを確認した。また、虫の声を楽しみ、四季を感じるのには日本人独特の感性で、こういった感覚を持ち続けながら、帯広の森の自然を大切に、50年後もつないでいきたいという話題が出た。そのために自分ごととして帯広の森に関わるには何が必要かを話し合った。森で宿泊キャンプができると新たな層を引き込めるといったアイデアや、市内の他の公園にも帯広の森を知ることができるサテライトブースなどを設置するといったアイデアが出された。誰がそれを担うかについては、これまで帯広の森に関わってきた人の中でも、子どものころから親しんできた高校生などの若い世代が講師になることで、幅広い世代から注目を得られるといった提案が出た。帯広の森に触れる新たなきっかけ

けや、森と市民をつなぐ新たな担い手の存在によって、50年後、人も動物も輝く自分たちの森として育んでいきたいという提案をまとめた。



ファシリテーター感想

参加者から最も意見を引き出したいテーマである、「50年後の帯広の森」を話し合う中で感心したのが、帯広の森の四季ある自然の魅力は、日本人だからこそ感じられるもので、これからも自分ごととして森に関わろうという意見が出たことだった。これまで私は少しでも多くの人に帯広の森に関心を持ち続けてもらおうと試行錯誤してきた。100年の森づくりには、これからも多くの力が必要で、市民にとって帯広の森に関わることは当然、ぜひ一緒にやろうという気持ちで森のことを伝えてきた。そこに、帯広の森の自然を将来につなぐことは日本人として当然という意見は、とても心強いものであり、少しのしくみや働きかけで、帯広の森を育む仲間がもっともっと増える大きなムーブメントを生み出せるような気がした。また、帯広の森のことを伝える担い手について、最初はグループで具体的な意見が出にくかった。しかし、幼い頃から行事などを通して森に親しんできた高校生の山越さん自ら、高校生がリーダーになりたいという素晴らしい意見が出された。この発言は、長年の帯広の森の取り組みが、継続的に森を育むことの大切さや、多くの人の行動・協力の不可欠さ、そのための方法を皆で考える必要があるという意識を、若い世代に植えつけることができた結果のひとつと言えるのではないだろうか。

ワークショップ第3グループ

参加者一覧

安斉 美星、二村 奏、中山 大志、
大井 和美、嶋野 奈津美、清水 隆典、
大石 拓人（ファシリテーター）



グループ内での議論について

まず、自己紹介の際に参加者の原体験「私と森（自然）」を話してもらった。帯広の森に限らず、出身地で森や自然の中で過ごした思い出を語り合い、グループ内でどのような人が参加しているのかを一人ずつ発表しあった。

自己紹介後、帯広の森の印象をそれぞれ付箋に書き出し、発表しあった。森の魅力的なところ、課題を思いついたままにキーワードだけ書き出してもらい、発表してもらう際には背景や補足を加えてもらった。癒やしや気軽さなどの肯定的な意見が多い中、昼でも暗い、公共交通が少ないなど、各自「もっとこうだったらいいのに」と思うところも少なからずあり、うなずきながら話を聞いていた。

次に、これから帯広の森でやってみたいことを聞いてみたところ、教育活動や安らぎの時間、キャンプ、サバイバルゲームなど多彩なアイデアが出てきた。

最後に50年後の森がどうなっていたらいいかを考えるうえで、これまで書き出したキーワードを俯瞰してみたり、項目分けしたりすると、第3グループは人（市民）が話題の核となっていることに気づいた。テーマであるみんなが幸せな森となるためには、「50年後も市民から必要とされる森」であり続けることが重要であり、そのために、森と一緒に、人も育てていかなければならないという結論に至った。



ファシリテーター感想

ワークショップ中は終始和やかに進み、意見も活発に出てきて、参加者も積極的に参画してくれたと思う。印象的だったのが、森と人との距離感という意見が魅力と課題の両方から出ており、年代や立場、生活スタイルによる感じ方の違いを実感した。距離感の中には物理的な距離、心的距離、野生動植物との距離、様々な意味合いが含まれており、帯広の森をはじめ市内の自然への関心の高さにも驚いた。参加者の一人から発せられた「森と育つ」。この一言にこれからの森と市民が築く、より良い関係が集約されていると感じる。帯広の森が公園や緑地としての役割だけでなく、教育や文化的な価値が付随している場所と認識してくれていることも、これまで、市民活動やはぐく一むで行ってきた森づくり活動の一つの成果だと考える。

一方で、森に対する興味の薄い層へのアプローチが課題であり、積極的な広報と次世代に向けた森づくり文化への昇華と引き継ぎ、安心して森に入れるような環境整備をこれまで以上に期待されていると感じた。

ワークショップ第4グループ

参加者一覧

佐藤 柑太郎、角谷 夏望、千葉 由香、
小野木 良、嶋野 丈治、
大熊 勳（ファシリテーター）



グループ内での議論について

第4グループのメンバーは、はぐくむの音楽祭に生徒とともに参加したことのある小学校の先生や、トレーニングとしてのランニングのフィールドとして帯広の森を日頃から使っている大学生、親子での森づくり活動を進めているNPOのメンバーなど、多様な形で帯広の森を活用している方々で占められていた。

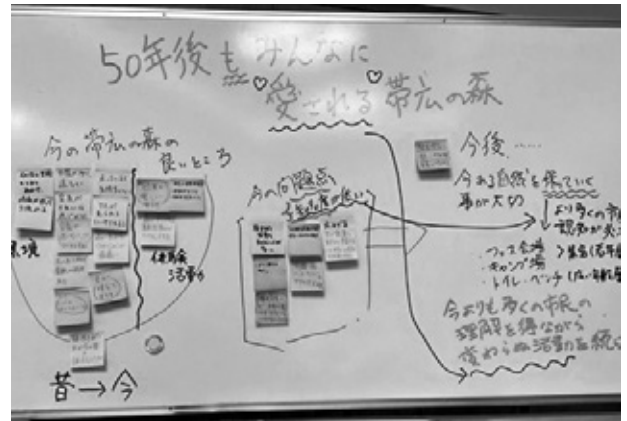
ワークショップの時間では帯広の森の良いところとして、森という環境が持っている良さ（景観の良さ、空気の美味しさなど）と、実施できる体験活動の良さ（森づくり活動やスポーツなど）が話題に上がり、過去から現在にかけて森の魅力が認知され、活用されてきたことの素晴らしさについて共有できた。

帯広の森の課題として、森の魅力の知名度が低いことが挙げられた。せっかくの魅力が多くの人に伝わっていない現状は、森の魅力が後世に継承されていかない可能性を示唆しており、解決すべき課題としてメンバーみんなで合意した。

認知度を高めるためには、音楽フェスの会場やキャンプ場として森を活用し、若年層を取り込むことが大切ではないかという意見が出た。他方で、現在の森にはあまり手を加えずに、トイレやベンチをしっかりと整備することで幅広い年齢層が帯広

の森で快適に過ごせるよう改善することが大事ではないかという意見も出た。

まよめの発表は「50年後もみんなに愛される帯広の森」というテーマとなり、知名度向上を目指しながらも今ある森の良さを損なわないよう今の活動を続けていこうという結論となった。



ファシリテーター感想

ワークショップでは森に新たな魅力や機能を足すことを提案する班が見られた一方で、4班はむしろ大きな変更を加えないという方向性を見出した。この結論は、メンバーのそれぞれがこれまで自身の活動のために実際に森を利用してきた実績があり、森の空気感をよく知っているからこそたどり着くことのできた結論だったように思う。

こうしたワークショップで提案されるあらたな方法での森の活用というのは、大なり小なり森に負担を強いることになり、時には不可逆的な変化をもたらすこともある。50年かけて成長してきた森の利活用を考えるにあたり、わたしたちは前向きな夢を描きながらも、慎重に森と関わる必要があるという重要な視点を会場に届けてくれた発表だったと感じた。

～世界に誇るグリーンインフラ・帯広の森～

中央大学研究開発機構・機構教授 東京大学名誉教授 石川 幹子

基調講演とワークショップ講評を行います。ここで基調講演の講師であります中央大学研究開発機構機構教授石川幹子先生を紹介いたします。石川先生は、東京大学農学部を卒業後、ハーバード大学大学院修士課程を修了され、慶應義塾大学環境情報学部教授、東京大学大学院都市工学専攻教授、中央大学理工学部人間総合理工学科教授を経て、中央大学研究開発機構・機構教授を務めていらっしゃいます。都市計画とデザインの両輪で世界的に活躍をされていらっしゃいまして、様々な著書、日本都市計画学会論文賞・計画設計賞など数多く受賞されています。石川先生、よろしくお願いいたします。



石川先生

石川でございます。ワークショップの発表、本当に素晴らしく伺いました。

基調講演のタイトルは、「世界に誇るグリーンインフラ・帯広の森」です。実行委員会の皆様から50周年記念シンポジウムの基調講演の御依頼をいただきまして、「そんな大役はできない」と思ったのですが、清水の舞台から飛び降りる覚悟で、お引き受けいたしました。実は、私、「帯広ってすごい街だ」とずっと思っていて、いつか、この歴史の持つ迫力を皆様にお伝えしたいと思っていたからです。

もう、30年程前になりますが、私、アポイントメントもなしに、突然、帯広市役所に伺って、明治時代の帯広市の都市計画について伺ったことがありますが、都市計画課の窓口で、御対応いただいたのですが、見ず知らずの私に、その方は瞬間的に御理解いただき、「この二つの図面が大事」と、明治28年と、昭和19年の都市計画図を見せてくださいました。いまでも、2枚の図面は、私の宝物で大事にしております。市役所の方が、御自分のまちの原点を確実に理解しておられることに感銘を受けました。

この基調講演は、帯広の森50周年を対象としたものですが、これからの50年、そして100年を考えるには、過去・現在・未来へのパースペクティブを持つていなければなりません。したがって、皆様には、すでに御承知のお話が多々、ございますが、滔々とした歴史の流れを俯瞰するという観点から、御容赦いただければ幸いです。

1. 近代化の歩み

十勝平野は、日高山脈、大雪山系、白糠丘陵に囲まれ、南部は太平洋へと広がり、中央を十勝川水系、歴舟川、利別川が流れる悠大な地です。御承知の通り、開拓は明治16年（1883年）、依田勉三の率いる晩成社の帯広への入植から始まりました。



写真1.晩成社移民団(明治16年) 帯広百年記念館所蔵

河西郡帶廣市村廣帯郡西河

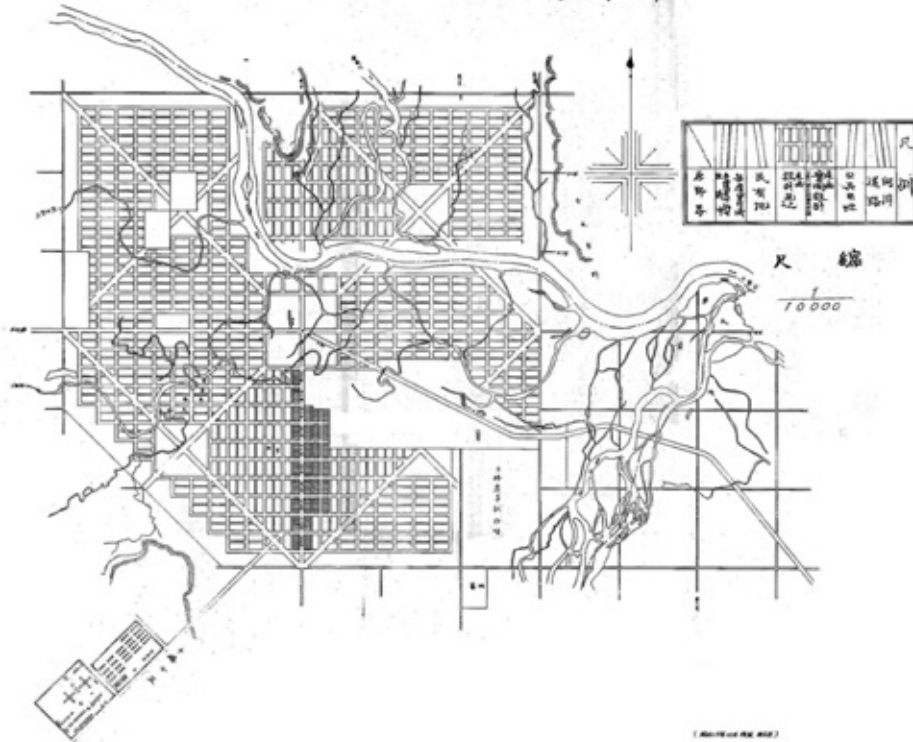


図1 河西郡帶廣市街予定地平面図(明治28年) 出典:帯広市史(2003年)

開拓は、トノサマバッタの大発生等、苦難の連続でした。一方、明治21年札幌道庁殖民課は、

「此の地、将来において運輸の便、生産の富、位置のよろしきを有す」

と帯広の地を高く評価し、測量を行い、斬新な市街予定図を作成しました。これが、私が30年以上前に帯広市から複写していただいたものと同じ「河西郡帶廣市市街予定地平面図」(明治28年)です。

見れば見るほど、不思議な図面です。格子状のグリッドの街路の中に、放射状の斜路が入っています。考案したのは、札幌農学校第一期生の内田澹、田内捨六、柳本通義等で、今日なお、帯広市の「水光園通り」として歴史を刻んでいます。



写真2.札幌農学校第一期生、右から内田澹、3人目田内捨六、4人目柳本通義
出所:『十勝をつくった人びと』

街区形成の意図については、格子型街路は「効用の原理」、斜路の広場は「参加の原理」とし、火防線としての役割も有したと記されています。新天地にける決意が伝わってまいります。

札幌農学校には、北米からクラーク博士が指導にあたっておられましたが、この街路計画は、アメリカの首都ワシントンの計画に準拠したものであると述べられています。

次に示す図面が、首都ワシントンの原型となるプランです。

ワシントンの都市計画は、ピエール・ランファンにより1791年につくられたものです。ランファンは、独立戦争の義勇兵として渡米した人物で、ベルサイユ宮殿の庭園師を父とし、宮殿の中で育った方でした。芸術的素養を認められ、ワシントンの都市計画を政府から依頼されて作成した図面です。ベルサイユ宮殿とまちの関係が投映された計画となっています。斜路が交差する様式はベルサイユ宮殿の庭園様式で、交差点となる広場には、通常、モニュメントや噴水がおかれており、首都ワシントンも、そのようになっています。

ところが、帯広の計画は、全く異なっています。斜路の交差する広場は、なんと、「参加の原理」を取り入れたと書かれています。これは、おそらく、どなたも考えつくことのできなかった思想であり、開拓者魂に、私たちは、いま、謙虚に学ぶ時なのだろうと思います。



図2 アメリカ合衆国首都ワシントン計画図(1791年)
出所:Brown,Glenn ed.(1901), *The Improvement of The City of Washington*, Washington D.C., Government Printing Office.

ピエール・ランファンの計画は、新政府の財源不足から遅々として進まず、双方に大きな溝が生じ、ランファンは解雇されることとなりました。その後、彼の計画は、助手を務めていたアンドリュー・エリコットが作成したこととされました。

ランファンは、失意の中で亡くなりますが、1902年になり、真の作成者であることが立証され、名誉回復が行われました。いまは、国会議事堂を遥かにのぞむ、アーリントン墓地に眠っています。

遙か太平洋を隔てた帯広の地で、ランファンの計画が、異なる形で受け継がれていることを知ったならば、彼は、何とすることでしょうか？

また、帯広市民の皆様も、自らのまちのルーツが、ワシントン、そしてベルサイユ宮殿の庭園にまで遡ることに思いを馳せることができるのは、まるで、夢のような物語です。

2. 鉄道の整備と産業の発達

明治38年に釧路線、明治40年に十勝線が開通すると、帯広では、豆に代表される雑穀の取引が活発に行われるようになり、ビート工場、バター製造、

そして十勝に豊富にあるカシワの樹皮からタンニンを取り、皮なめしの素材とする工業が盛んとなりました。軍の需要もあり、製紙業は隆盛を極めました。アイヌの人びとが護ってきたカシワ林は消滅してしまいました。



写真3.カシワの樹皮を剥ぐ作業 出所:「十勝国産業写真帳」

草創期を担った晩成社は、先駆者ゆえの資金の枯渇から経営破綻に陥り、すべての開墾地は人手に渡り、昭和7年、解散となりました。依田勉三は終始、貧困の中にあり、つぎのように詠んでいます。

「有難し 雨の降る日の衰(みの)とかさ
錦に勝ること な忘れそ」

3. 都市の発展とセントラルパーク

(緑ヶ丘公園)の整備：昭和初期

帯広は、昭和8年4月、市制を敷きました。戸数6,250戸、人口32,506人と記載されています。抜本的な都市整備計画が策定され、昭和9年3月には「帯広市風景勝地・行楽遊観地・その他調査書」が策定されています。

①水光園(1.8ha、大正15年開設)：水光園、帯広川支流の清冽な湧水のある場所で、貸しボート等遊覧施設有り。

②緑ヶ丘公園(88.3ha、昭和4年開設)：南部の十勝刑務所のあった場所を、帯広市が買い取り公園としたもの。

③三井公園、④南豪植物園、⑤帯広競馬場、⑥鈴蘭公園、⑦帯広川逍遙地帯、⑧大通り公園予定地、⑨防風林及びその他樹林地帯(国有林50.5ha)等です。



写真4.戦前の水光園(水光園風景絵葉書より)

この写真が戦前の水光園で、ボート場や釣りで市民の皆様が楽しんでいる様子がわかります。背景に映っている橋は、現在も残っており、帯広市の原点です。保存、活用について皆様で考えていかれるのが、いいのではないのでしょうか。

このように、昭和8年の計画は、市内の公園だけではなく、河川逍遥地や防風林も含む、壮大な緑地計画でした。東京における緑地計画は、昭和7年に調査を開始、昭和14年に成案をみましたが、帯広市の緑地計画が同時期に行われ、今日の都市基盤を形成していることは、ほとんど知られていません。なかでも市の将来の発展を予測し、88.3haにものぼる緑ヶ丘公園を、用地を国から買い入れ整備したことは、百年後の今日、大きなレガシーを市民に残しています。どなたが、このように優れた計画をつくられたのか、しっかりとした調査を行い、後世の人びとに伝えていくことが重要です。

緑ヶ丘公園には十勝池が掘られ(写真5)、植樹が行われ、豊かな湧水を活かした逍遥路がつけられました。



写真5.十勝池(緑ヶ丘公園)

昭和30年代には「野草園」も整備され、「かけがえない貴重な自然をいつまでも保存し、自然に親しみ自然を愛する心を育てる場」として、貴重な十勝平野に自生していた野草や樹木105科530種が守り育てられています(写真6)。



写真6.帯広市野草園 野草インフォメーション



写真7.帯広市野草園 散策路

公園を歩きますと、崖線の直下には日本庭園が営まれた跡がありますが、様々の施設が建設された結果、現在では湧水は枯渇しています。しかし、一カ所だけ、今も滾々と湧く湧水が残っています。これは帯広市民の財産ですから、水の公園を回復する道筋を、皆さんでお考えになることが大事だと思います。



写真8.緑ヶ丘公園に残る湧水

帯広市は、鉄道により発展を遂げ、南部へと市街地が拡大します。図3は、私が、30年ほど前に帯広市から頂戴した昭和19年の都市計画図です。水光園通りに加えて、南部にも、斜路が交差する大通り公園が創り出されたことがわかります。

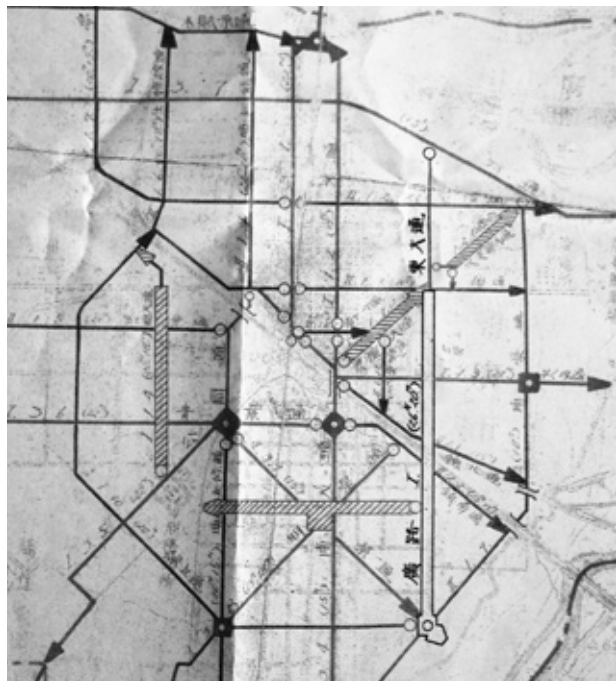


図3 帯広市都市計画街路一般図(昭和19年)

水光園通りは幅員36メートルで(図4)、両側に車道と自転車道があり、中央部がゆったりとした緑地帯となっており、帯広市の誇るブルヴァール(並木道)です。並木道に沿って、大正11年に建設され、国の重要文化財に指定されている旧双葉幼稚園園舎等もあり(写真9)、帯広市の歴史を物語る貴重な並木道です(写真10)。

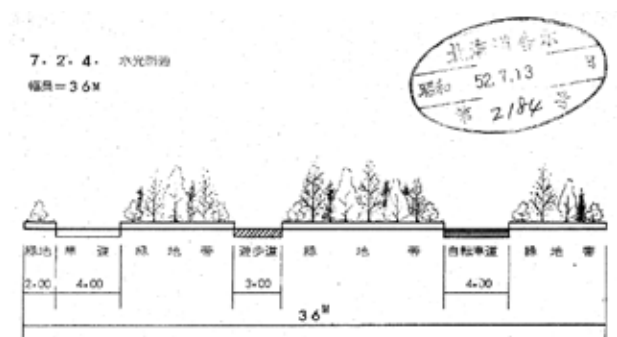


図4 水光園通り断面図(幅員36メートル)



写真9.旧双葉幼稚園(重要文化財)



写真10.水光園通り

大通り公園には、「参加の原理」が大胆に取り入れられました。4つの斜路が広場に合流するという、おそらく全国には例のない公園です。是非、次の世代へと確実に手渡していただきたい帯広市の「文化資産」です。



写真11.大通り公園

4.「近代的田園都市」と「帯広の森」

①都市の成長に対する戦略プランの提示

戦後、日本が高度経済成長へと突入する昭和30年8月、第五代帯広市長として、吉村博が就任されました。吉村市長は、まちづくりは「戦略的に行うべき」とし、当時は、ほとんど行われていなかった「総合計画」を昭和34年に策定しました。市の発展の基本的方向として、文化、産業の振興とあわせ、「北方の風土を生かした、住んで気持ちのよい美しいまちづくり」を掲げました。この市民の誰にでもわかる目標が、今日の帯広市の土台となっていると考えます。

吉村市長は、昭和44年6月にウィーンで開催された国際地方自治体連合の国際会議に出席する機会があり、ウィーンの森を訪れ一気に帯広の森へと構想がふくらんだといわれています。帰国後、時を置かず、昭和45年9月、「帯広の森とまちを創るグリーンプラン」を提示されました。概要は、次の通りです。(図5)

「街を抜けると森がある。どの道をいっても、その前に十勝特有の大樹林が大きく我々を迎え入れる(略)。市民の誰もが緑と太陽につつまれ、家族揃って一日を楽しく過ごす森、百年、二百年後の夢を描き、希望をもって新たな伝統と創造を生み出す母の森、この森が帯広の森である。」



図5 近代的田園都市構想図(昭和45年)

②ウィーンの森とは

ウィーンの森の約350年前の図面(図6)と現在のウィーンの森の位置です(図7)。



図6 ウィーン 1683年

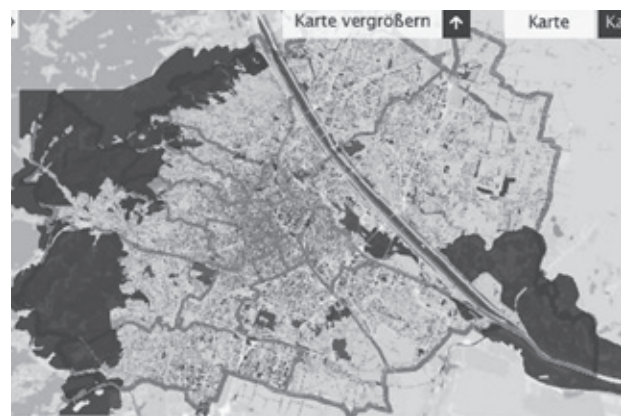


図7 ウィーンの森位置図(2024年)

出所:図6,7共に、ウィーン市ホームページ

図6にみられるように、17世紀のウィーンはハプスブルグ家が治める城壁で囲まれた都市であり、ドナウ川が流れています。市の郊外には、狩猟地であった森が広がっていますが、鬱蒼とした森ではなかったことがわかります。1870年、森の大部分を伐採する計画が進められましたが、広範な市民の反対運動により、ウィーンの森は護られ継承されています。

現在、ウィーンの森の枢要部は、ヨーロッパ自然保護区(Natura 2000)となっており、生物多様性の宝庫です。全市域を対象として、動物・植生・野鳥の生息地を評価したビオトープ・マップが作成されており、まちづくりの重要な指標となっています。

③田園都市のルーツ

吉村市長が掲げたコンセプトが、「近代的田園都市」でした。田園都市のルーツは、エベネザー・ハワードというイギリスの社会改良家が提案し、実施にうつした Garden City です。その理念は次の通りです。

ハワードは、1902 年、『明日の田園都市』を発表しました。彼は、都市の有する娯楽・社交・雇用の機会・高賃金の魅力と、農村の有する自然美・新鮮な空気・低家賃等の魅力は、二者択一のものではなく、両者の利点を兼ね備えた第三の選択肢があると唱え、「都市と田園の幸福な結婚」を目標としました。

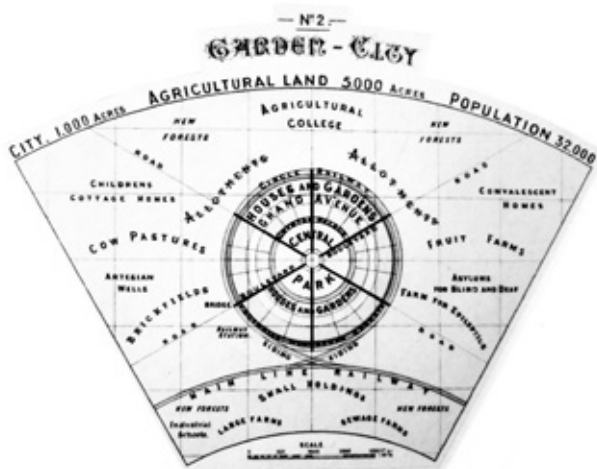
彼の提案した田園都市は、人口 32,000 人、市街地面積 400ha で、これを取り囲む 2,000ha の農地から構成されていました。重要な点は、以下の三つの原則が導入されたことです。

第一は田園都市の土地は、理想を持つ有志が支払う社債により一括買収され、土地は田園都市株式会社が所有し、地代による収益は、都市全体の運営に還元されるものとしました。

第二に都市を取り囲む農業地帯は会社が所有し、恒久的に維持されるものとしました。

第三には、一つの田園都市が計画された人口に達した場合は、少し隔たった所に、第二の田園都市をつくり、高速交通機関で結び、都市圏を構成するものとしました。しかし、彼の理想に添って実現した田園都市は、わずかに二つに留まりました。

図 8 が田園都市のダイヤグラム、写真 12 が最初の田園都市レッチワース（イギリス）の現在の姿です。



The Garden City showing the rural belt of agricultural

図8 ハワード田園都市のダイヤグラム

出所:Howard, Ebenezer(1902),Garden Cities of To-morrow, London:Swan Sonnenschein &Co.Ltd.

人口は約 3 万人、周囲をグリーンベルトが囲み、都市の成長を制御しています。吉村市長の提唱された「田園都市」とは大きく異なっていることが、御理解いただけたと思います。記録を精査しましたが、吉村市長が、ハワードの田園都市を調べたという記録を発見することはできませんでした。

結果的に、このことは、世界に類例のない「帯広の田園都市」を生み出すことに繋がったのです。



写真12.第一田園都市 レッチワース 筆者撮影

④先駆的都市計画の実施

吉村市長の「近代的田園都市」構想の、極めて独創的な考え方は、高度成長の時代に都市の適正規模を想定し、そのインフラとして「帯広の森」を提唱し実現していったことにあります。これは、時代に先駆けていた考え方であり、地球環境問題が顕在化する今日、世界の人びとが学ぶべき先例です。

すなわち、吉村市長は帯広市の将来人口を 20 万人とし、市の南西部に延長 11.5km、幅員 550m、面積 686.13ha の森を創り出し、北部の十勝川、東部の札内川と結び、緑地で帯広のまちを取り囲む構想を掲げました。この案は、第二期帯広市総合計画（昭和 46 年～55 年）の主要施策となり、市議会で激しい論戦がかわされました。昭和 40 年代は四日市、水俣での公害問題が顕在化し、暮らしの安全・安心な場の形成が求められていました。議会での質問はこの点に集中しました。

質問「森の莫大な事業費に対し、市民は都市基盤整備及び生活環境の充実を求める声も大きい。」
吉村「市民全部が、『よし、わかった、子孫のために、将来のために、何百年後のためにそれだけの力をだしていこうじゃないか』、という納得がいただければ、帯広の森は意味がないと思います。」

こうして、白熱した議論の結果、帯広の森造成事業計画は、昭和48年11月5日、特別委員会で賛成7、反対5（病欠1）、本会議で賛成18、反対15という僅差で可決されました。

帯広の森の特色は、国有林等の既存の森林を護ったのではなく、開拓で切り拓いてきた農地を再び森にかえし、多くの人びとが、将来にわたって憩うことのできる文化的ストックを創り出そうとしたことにあります。

一方で、開拓をしてきた人びとの揺れ動く、思いが綴られています。

「明治半ばより、祖父等が鋸を持って大木を倒し、斧や鎌をふるって木や草を払い、一鍬一鍬土を起し拓いた此の大地を、と思うと一言に協力せよと言われても答えはなかった。」

隣組や町内の会議は幾度となく繰り返され、また、「畑にしゃがんで考え込む姿」もあったと書かれています。

「皆それぞれに先祖の開拓の苦労を思い、此からの生活を考えたのだろうが、関係地権者は時間がたつにつれ、同意方向になった。今思えば随分思い切った構想にのったものだと思う。この森が出来上がった時は、壮大なものになるな」と想像した時もあった。」

開拓の歴史を背負う一人一人が、過去と現在、そして、まだ見ぬ世界を夢みる思いが伝わってきます。市は、丁寧な話し合いを継続し、用地取得の合意には20年の歳月を費やし、牛歩の如く進められました。当事者の「市民的自由」、すなわち自由な

意志の発露と合意形成が、おそらくこの歴史的なプロジェクトを推進する力になったと考えます。

「帯広の森」の面積は、最終的に406.5ha、幅員550m、延長11kmとなりました。昭和50年に開催された第一回植樹は500人の参加でしたが、年々、増加し、第30回植樹祭が終了する2004年までに、148,000人、23万本の植樹が行われました。写真13は植樹の風景、図9は、現在の帯広の森の位置図です。



写真13.帯広の森 植樹風景(平成15年)



図9 帯広の森の位置図

5. 科学的森林育成計画の導入

帯広の森のもう一つの大きな特色は、科学的森林育成計画が、まず、始めに策定されたことでした。ここに持ってまいりましたのが、昭和50年3月に出された調査報告書です。作成された方は、以前、帯広営林局に在籍していた牧野道幸氏でした。ここでは、地形、地質調査を踏まえて、森の育成の基盤となる図面として、応用植物社会学に基づく「現存植生図」が作成されました。立地の有する潜在的特性を現地調査により科学的に検証し、百年の計を立てる基礎的作業が、50年前に行われたのです。

畑地として開墾された台地上の森林の潜在自然植生は、落葉広葉樹林（カシワ・ミズナラ林）です。残存していた樹林地の調査が行われ、帯広農業高校の樹林地に良好な群落が残っていることがわかりました。写真14は、この報告書に掲載されているカシワ・ミズナラ林で、写真15は、私が撮影した現在の姿です。階層構造が豊かで、高木・亜高木・低木・地被・野草が、優れた樹林地を形成しています。この森を目標とする階層性豊かな落葉広葉樹林への遷移を促す保全・育成活動が、各所で進んでいます。



写真14.カシワ・ミズナラ林
(帯広農業高校 1975年)
出所:「帯広の森計画基礎調査報告書」



写真15.カシワ・ミズナラ林
(帯広農業高校 2024年)

また、帯広の森には台地を開析して流れる帯広川などの小河川が存在しており、段丘崖と沢筋に添ってヤチダモ・ハンノキ林が分布しています(写真16)。生物多様性の宝庫で(写真17、18)、きめ細かな保全活動が展開されています。

苛酷な自然環境の中で、成長に時間を要するエゾマツ、トドマツ、耕地防風林のカラマツ林、植林の過程で導入されたチョウセンゴヨウ等の針葉樹については、現在、林業の経験者がサポーターとして活動しておられ、適切な間伐等の指導を、子どもたちにもできるように、市民総出の取組が展開されています。



写真16.小河口沿いのヤチダモ・ハンノキ群落



写真17.バイケイソウ



写真18.エゾノシモツケソウ

6. 市民が育む「帯広の森」

2010年に活動拠点として「帯広の森・はぐくむ」がつくられたことは、一時期を画する出来事となったと思います。市民の活動拠点と森の育成、環境教育の場がたちあがったことにより、責任をもった市民活動の展開が可能となったのです。



写真19.帯広の森・はぐくむ

帯広の森は406.5haという広大なエリアであり、現在8つの市民団体が、それぞれ区域を受け持ち、活動を行っておられます。エゾリスの会、ぶれいおん・とかち、帯広の森サポーターの会、報徳会、もりとも！、森の回廊@十勝、日本森林林業振興会、帯広

の森町内会有志等の皆様で、本日も多くの方々が参加しておられます。お写真のみで恐縮ですが御紹介させていただきます（写真20～27）。



写真20.次世代育む森遊び(第7章「帯広の森」新聞記事 P257に拡大再掲)



写真21.たき火、大人がしっかりみまもる



写真22.ぶれいおん・とかち 今村江穂さん



写真23.木登り



写真24.帯広の森サポーターの会 小原和弘さん



写真25.帯広の森 報徳会 馬淵征雄さん、林業技術者のパワー 山田英和さん(帯広の森50周年記念事業実行委員会)



写真26.エゾリスの会 三日市則昭さん(中央手前左側)



写真27.エゾリスの会の観察小屋

写真 28 は、帯広の森にある展望台からみた、現在の帯広の森です。かつて開墾された畑と耕地防風林であった地には、豊かな森が立ち上がり、農業、市民菜園、スポーツ、国際交流の拠点（JICA）等、市民だけではなく、世界の人びとが訪れる、多様性あふれる森へと展開を遂げています。

このように歴史と人の営みの重層する優れた文化資産は、「世界に誇るグリーンインフラ」ということができます。

グリーンインフラは、「自然環境を生かし、地域固有の歴史、文化、生物多様性を踏まえ、地球環境の持続的維持と安全・安心な暮らし、人々の命の尊厳を守るために、戦略的計画に基づき構築される社会の富」です。

アイヌの人びとが護ってきた、千古斧鉞（せんこふえつ）を知らぬ森は、明治期の開拓により日本有数の農業地帯となりましたが、まちづくりの夢が、ワシントン、ウィーン、田園都市と、世界に繋がり、十勝の風土に溶け込みながら、市民の力で実現させていったことは奇跡とも思われます。何よりも一人一人の魂の自立を尊重する、開拓者精神が脈々と流れていることを思います。

上皇后美智子様は、北海道開拓 150 年にあたり、次のような歌を詠まれています。

この広き大地拓かむと来し人ら

依田勉三もその一人にて

出所：美智子（2025）：歌集ゆふすげ（岩波書店）

遥かに連なる日高山脈の峰々は、このような営みを、変わらぬ姿で抱擁しています。



写真28.帯広の森(2024年9月) 森・農地・菜園・牧場のモザイク。遥かに日高山脈がそびえる。

基調講演に続き石川先生のワークショップ講評

ワークショップの各グループの御発表への講評です。皆さん、短時間で、凝縮された素晴らしい内容です。この力は、帯広の森の次の50年への、大きな第一歩となると、確信いたしました。ありがとうございました。

①第1グループ

コーディネーター 赤嶺 太紀子
山川 晋示、北久保 希愛、能登 綾香
佐々木 梨江、磯野 照弘、田中 裕史
井口 百合香



第1グループのみなさん

- 50年後の帯広の森「何があれば、何ができれば幸せになれるか？」
- 良い空気、四季の変化、馬車でまちから森へいきたい、ウィーンの森との姉妹都市、自然と普段かわっていない人が、かわれるようなイベント、音楽、アプリ、バス停の整備、自然活動と文化的活動を両方行う、情報発信の強化。

講評：「来てみたくなる森」ということで、私もとても新鮮でした。今まではまだ育てている森で、いよいよ、皆さんいらしてくださいという、そういう時代になったのかなと。ですから、来てみたくなるというのは、次の50年に入ったということです。

馬車できたいというのは、とても、おもしろいですね。ニューヨークのセントラルパーク、私はずっと研究してますけど、公園を管理する方、馬車に乗ってるんですよ。カッコいいんですよ。馬車で公園の管理をしていらして、素敵なお帽子をかぶっていらっしゃいます。

市民や観光客の方が、馬車で帯広の森に行くことができれば、SNS等で発信すれば、これだけアジアの皆さんが北海道にきておられますから、人気スポットになると思います。

②第2グループ

コーディネーター 宮崎 直美
山越 芽依、関口 翔太、阿部 真由子
永守 祥嗣、久保 美香



第2グループのみなさん

- いま、がんばっている時。
- イベントで、森へいくきっかけが沢山うまれるといい。
- リピーターが増えることが大事。
- 虫の声が聞こえるなど四季を感じられる自然が最大の魅力。
- 宿泊キャンプができると新たな層を引き込める。
- 市内の他の公園にも帯広の森を知ることができるサテライトブースを設置する。
- 50年後、人も動物も輝く自分たちの森として育んでいきたい。

講評:第2グループの皆さん、とてもいい発表でした。人も動物も輝く、それから、とても印象に残ったのは、「自分たちの森」という、発表していらっしゃった方いましたよね、やはり誰かの森じゃなくて、ここは自分の森なんだよと、そういうことはすごく大事だと思います。それから虫の声。これは発表してくださる方もおっしゃってましたけど、日本だけですね、江戸時代の日本庭園なんか見ますと、鈴虫とか、音に対する物語があります。これはたぶん日本だけです。こういうことが、どんなふうにできるのかというのは、私たちが忘れていたことなのではないかなと思いました。

それから、高校生の方が「大人と子供の中間にいる。自分たちが何かできたら、子供がもっと楽しめるんじゃないかな」とこれもいいですね。

なるほど。高校生のお兄さん、お姉さんがちっちゃな子と、そうしたら、本当にみんな楽しく遊べるんじゃないかと、そんな気がいたします。

ご自分の気持ちがプレゼンの中に表れていて、とてもいい発表だったと思います。

イベントでリピーターが増えることが大事というふうにおっしゃってました。50年後も市民から必要とされるということですね。帯広の森というスポーツ。おそらく今大事なことは、帯広の森っていろいろ人によってですね、十人十色でいろいろあります。やはり森全体として包容力がある力強い森だと思います。ネーミングも含めて、これから、考えられたらいいのではないのでしょうか。

③第3グループ

コーディネーター 大石 拓人

安斉 美星、二村 奏、中山 大志

大井 和美、嶋野 奈津美、清水 隆典



第3グループのみなさん

● 50年後も市民から必要とされる森を目指す。

● 「森と育つ」

講評:極めて、重要な御指摘をされました。森の中で育っていく。子供たちとつないでいく。この「つなぐ」ということが大事という御発表でした。私の先程の基調講演も同じです。

「今と未来をつないでいく」ことが、それが50年後の未来の森に大事なことでないかという御発表でした。

④第4グループ

コーディネーター 大熊 勳

佐藤 柑太郎、角谷 夏望、千葉 由香

小野木 良、嶋野 丈治



第4グループのみなさん

● 時間がゆっくり流れる帯広の森

● 50年後もみんなに愛される帯広の森

講評:集合写真が面白い。手を広げていらっしゃる方がいらっしゃいます。「みんなに50年後も愛される」、いいですね。みんなに愛される森ってとってもいい言葉ですね。最初に発表なさった方が、子供の頃に自分が植えた木が、育っていく。これはおそらく一番大事なことだと思います。自分が植えた木が育ち、自分の子供とまた植え、そういう形で時間を共有する。そういうメッセージっていうのがですね、御発表の中から伝わってきたと思います。

最後に、今回の50周年のシンポジウム、引き受けることができないような大役を仰せつかりまして、どうしようと思ってですね、ずっとくよくよ考えてきましたけれども、みなさん素晴らしい御発表でした。

みなさんもちろん誇りに思っていらっしゃると思いますけども、外から来た私がこれだけ感銘を受けるのですから、世界に誇るまちであると思います。歴史のことを、前段で申し上げましたが、将来をどんなまちにしていくかは、市民の皆様、お一人お一人です。

皆さんの思いを形にして、輝かしい先人の皆様が築いていらした帯広を次の50年、そして100年につないでいていただけたら、とても素晴らしいことだと思います。

以上で私の発表を終わらせていただきます。ありがとうございました。

〈志をつないでいく〉

未来の世代へ手渡していく緑ヶ丘公園。

昭和4年（1929年）から、先人達が創り出し、手渡してきてくださった帯広市の珠玉の公園です。あと5年で、開園100周年（2029年）を迎えます。

隣接地の少年院跡の活用は、未来を見据えた、しっかりとした議論と検討が必要だと思います。



緑ヶ丘公園：空とつながる大地



緑ヶ丘公園：木洩れ日のシラカバ並木、隣接地が少年院跡地

帯広の森50周年記念シンポジウムパネルディスカッション

～「帯広の森」を未来へつなぐ～

山田さん)

本日は帯広の森の今までの50年、今、石川先生からお話を受けたところで、これからの50年に向かって、早速パネルディスカッションを始めたいと思います。

今村さんは九州にお生まれで、九州で育った方です。成人になられてから我が帯広十勝に来られた方です。どうぞ自己紹介を含めお願いします。



今村さん)

今村と申します。NPO 法人おれいおん・とかちは、NPO 法人になってから20年足らずなんですけれども、前身の親子劇場の創立から今年で50周年を迎えた、実は歴史のある団体でございます。

子どもも親も一緒に育ち合うというような活動で、その活動の一環として「遊び」をすごく大事に捉え活動を行っています。その遊びの場の一つが、自然の中での遊び、森遊びで、力を入れてやっていきたいと考えております。2018年から帯広の森の昭和55年植樹区を使わせていただきまして、森づくりや遊びの活動を行っています。先ほどから若い皆さん達にもいろいろな声がありましたけれども、多世代で森で過ごすという楽しさを共有できるような、そういう場をつくりたいというふうに考えて、あそびの森、あしあとの森とネーミングをしまして、活動を行っています。本当にこのような場に登壇させていただくのは、恐れ多

いですが、この先50年の帯広の森の未来ということで、何か力になれるような、皆さんと一緒に考えていける場にしたいなと思っていますので、どうぞよろしくお願いいたします。

山田さん)

自分の生まれ育ったところと縁あってこの十勝に来られて、どんなふうに十勝を見ることができたのか、思うことができたのか。

思いという言い方をしてですね、どんなふうな風景が今村さんに影響しましたでしょうか。

今村さん)

はい。私は政令指定都市北九州市の割と大きな町で育ちましたが、小さい時に親に連れて行ってもらった自然の中でサワガニをとるとか、ギンナンを拾いに行くとか小さな自然体験がかなり自分の中では原体験になっています。それで帯広に住むようになってから、こんなに豊かな自然の中で何ができるかな？本当にうらやましい限りの自然環境だなというふうに思ったんですね。子供たちと一緒に自然の中で遊ぶ、触れ合うきっかけを作りたいというふうにすごく思いました。帯広は私の故郷とは違って、冬、雪が降ったり、とんでもない寒さだったりっていう、その四季の変化というか、それがまずすごく魅力的だと思いました。

自然に触れ合って育つことが子供たちが生きる力になっていくんじゃないかなということをすごく感じて



います。それまで帯広の森の活動を始めるまでは、はらっぱくらぶという別の名前で、十勝のいろんな場所、先ほどの発祥の地公園ですとか、緑ヶ丘公園ですとか、いろんなところに行って、とにかく自然の中で子供と一緒に遊んでいました。それが私自身のやりたいことでもあったし、十勝の子育ての魅力なんじゃないかなというふうに思っています。現在は帯広の森の定点で四季折々の変化を感じながら、活動を続けています。

山田さん)

金清さんも帯広十勝の生まれではありません。成人になりましたから、業務上という言い方はおかしいですけれども、会社ぐるみ、この帯広の隣町の音更町で集団移転されてこられた仲間でございます。

それ以来、我々と一緒に表になり裏になり、いろんなことでお付き合いをいただいていたという方でございます。自己紹介を含めてお願いいたします。

金清さん)

平成2年ぐらいの時だったと思うんですけど、東京にあった事務所が丸ごと音更町の鎮鍊（ちんねる）小学校に移ってきました。私は、現在、東京で働いていますけれども、事務所はその廃校跡で持続的に活動させていただいております。帯広の森との関わりは、かなり遡り、今回50周年ですけれども、30周年の記念のイベントの時に、実はこんな形で登壇させていただいています。それと、もう少し前に遡ると、帯広の森利活用計画という、先ほど先生のプレゼンテーションの中にあった立派な最初の報告書ではないんですけれども、帯広の森が20年を迎えるに当たって、このままで良いのか、一体どうするんだと。

今日、結構皆さんから森の利活用の話が出ていましたけれども、その20年目ぐらいの時に、もう既に大体植樹のめどが立ってきたので、後は利活用だということで計画を立てようというような話をいただいて、それは仕事でやったんですけれども、その時にはまだ森が十分森の実態を伴っていない状態、利活用と言っても、森の利活用ではなくて、敷地の利活用、何ていうんだろう、帯広市としては土地をいっぱい持っている。

だから、もっと有効に使えるんじゃないか、あれは森にするんじゃないんですかというところを、こういう風にも使える、ああいうふうにも使えるという森の利活用を何とか立案しろというような話が一方である中で、森としてどうしていくのかっていうのを考えようというような、ちょっとややこしい、難しいことに関わったことがあります。

その時には実態として、未だ森ではないので、今日の資料の中にも何かあったかもしれないですけども、森が育っていく100年の森づくりということを当初の計画の中でしっかりうたっておられたので、20年目は今どんな時点で、40年後には、20年経つとこんなふうになるだろう、50年の時はこんなじゃないのというようなことを想定して、そろそろ50年にもなってくると、森の実態というのが見えてくるでしょう。

そうしてからでも利活用を考えるのは遅くないんじゃないんですかというようなことを書かせていただいたのを覚えております。今見ると、まだ私は40代の頃にそのレポートを書いているんですけど、この先何10年後にどういう森になっていくっていう姿を描いている。

頭の中ではすごく明快に書いているつもりなんですけど、出しているレポートを見るとちょっとがっかりしており、こんなの書いてたかな、もうちょっとしっかり書いてたんじゃないかななんて思っていました。

山田さん)

本当に20年前にも金清さんが言われたように、最初に牧野先生がつくられた牧野案というのが帯広の森の実際の実施計画なわけです。帯広の森をこれからどう作ればいいのかということで、高野さんの高野案ということで、いろいろな検討をした経緯があります。確かにその時はある程度のことは書き込んだけれども、実際の利用、活用っていう部分でどうしようかっていうあたりまでには、はっきり言ってそこまでは踏



み込んでいません。こういう課題があるっていう課題設定がされてますけど、じゃあどうしようっていうところまでは残念ながらいきませんでした。

ただ、その辺のことをこの20年史の後、30年経って、実際に利活用をされている今村さんから、先ほどちょっとお話だけしていただきましたけれども、帯広市内の中で緑ヶ丘公園だとか発祥の地公園だとかで子どもたちと遊ぶということを一つのテーマとして、いろんなことを、フィールドワークをやられてこられております。

それで今村さんにお聞きしたいんですけども、帯広の森づくり、大事な過去、現在、未来をきちっと押さえることですよ。ということも言葉の中にありました。今、未来を見据えたときに、帯広の森で愁眉の問題っていうよりも、50年先にこんなあったらいいなって、今、ワークショップの中でいろんな話が出ておりました。

課題として出ていました。じゃあ実際に今現在やられているぶれいおん・とかちの活動の中から、本当に足りないものとか欲しいものとか、どんなものがありますでしょうか。

今村さん

はい。私達の活動は、活動の対象としては赤ちゃんからおじいちゃんおばあちゃんも一緒に参加してくださいというふうに呼びかけていまして、どなたでも参加してくださいというふうにはなっているんですけども、先ほどよりありましたように、なかなか小学生とか子供が一人で行きたいと思って行ける場所ではないということがあって、親の理解があって送迎してくれるとか、親子で参加する、ということにどうしても限定されてしまうんですね。

それで、参加実態としては、乳幼児の親子で参加するというのが一番多くて、小学校のせめて低学年ぐらいの子たちがもっと参加してくれたらいいなということはあるんですけども、実態としては小さいお子さんの親子の活動になっています。そこは課題としてはあります。

まず、それはそれとして、親世代がやはり自然の中で遊ぶ楽しさだとか、その自然の中でどんなふうに過ごせるかとか、森が楽しいというような体験をしている人がすごく少なくなっていると思っているんですよ。

それで、子供を連れていって一緒に遊ぼうというふうに思える大人が減ってきているというところが一番のネックになっているのかなと思っているので、

これから先、本当に森の楽しさとか、魅力を感じられる関係人口を増やす、そういった裾野を広げていくといいますか、そこがこれからますます重要なかなと思います。

先ほどの第2グループの中で、高校生が小学生と遊んだり教えたりというようなことが出ていましたけども、さまざまな役割を誰が担うかというところが大切な視点ではないでしょうか。こちらの資料にあります「幸せな帯広の森がどうやったら実現しますか」というアンケートにも、これがあったらいいな、あれがあったらいい、こうしてほしいとかっていうことがたくさん出ていますけど、じゃあそれは一体誰がやるのかなというところで、全てを行政にやってもらえることはないですし、そのみんなが描くこんな森だったらな、っていうことをどう役割分担していけるのかなということを考えていく、そういう仕組みが必要なのかなと考えていますので、今日参加して下さった皆さんがここで解散しちゃうのはもったいないなと思って、ぜひ何か今日集っていろんな意見を言うて下さった皆さんが、どんな形でも、今後も継続して何かをやっている担い手になってもらえたらいいなというふうに、ちょっと勝手に妄想していたところです。

山田さん

人がどういうふう to いろいろな社会的な活動と関わっていくかというのは、いろんな課題があると思います。まだこれから利活用と言ったときに、例えば交通の便のインフラ、それから急に降雨になったとか、雷が来たときの逃げ場所のインフラ、それからトイレのインフラ、具合が悪くなったときにどこかで横になれるようなインフラ、そんなものが多分どこかで必要な時期になってくると思っています、石川先生にもお伺いしたいんですけども、お話の中でですね、マネジメントという一括りの中でお話しされたと思うんですが、多分これはファンドも含めてですね、単に行政におんぶにだっこって言い方はおかしいけれども、行政がやるべき課題の一つだろうとは思いますが、本当に民間がやれるものがあるのかなのか、その辺は先生のご経験の中からですね、やっぱり公共投資だけでやってきたのか、それとも民間が何か、例えばなんとか商事提供のトイレです、なんてものがあるのかなのかかわからないけれども、そんなようなことが可能性としてあるんでしょうか。



石川先生)

都市のインフラとしてしっかり緑地をつくっていくことは、公共だけではできません。ですから、いろいろな方が、ステークホルダーというふうに言いますが、やはり50年経ったから、名前をもう一回みんなで考えたかどうかというふうに思っています。つまり、公共事業だけで、絶対に帯広市のインフラの緑地をつくることはできません。今日あまりに盛りだくさんでご紹介しなかったのですが、アメリカのボストンにあるハーバード大学というところで勉強いたしました。

そのボストンのインフラとなる緑地は、「エメラルドネックレス、緑の首飾り」って、市民の皆様が呼んでいます。いろんな公園を、公園道路でつないでいます。小さな公園を繋いで、それを全部集めてエメラルドネックレスって呼んでいます。

さっきどなたかが帯広の森というとスポーツ公園というふうに思う人が多いっておっしゃっていましたよね。ご案内していただいた時も、やっぱりスポーツが一番で、私は、いいと思います。例えば、ボストンのエメラルドネックレスの中に、レッドソックスがあるんですよ。松坂大輔さんがおられました。私、イチローを見に、わざわざシアトルまで行くくらいの熱烈野球ファンです。レッドソックスの球場も何度も行きました。

フェンウェイ・パークという名前ですが、フェンというのは湿地という意味なんですね。フェンという湿地をうまく使って、野球場を100年前に作ったんです。その隣がですね、なんとボストン美術館です。そのちょっと先に、ボストンフィルハーモニーがあります。

小沢征爾さんが指揮をされていたところです。スポーツがあり、美術館があり、音楽があり、それからハーバードの樹木園が、つながっています。

そこには日本の植物がいっぱい。横浜植木なんていうラベルがついていて、幕末の頃に横浜から船出して、お嫁に行った盆栽なんかがあるんですよ。ですから、いろいろな文化の蓄積が、エメラルドネックレスという言葉の中で、ボストンの財産になっています。

帯広の森って、都市公園で森のところだけっていう風に考えてらっしゃるかも知れませんが、訪れる方にとっては、アイスクリーム屋さんも、市民農園も、みんな一緒だと思います。森という言葉をもう少し帯広市全体の名前にしていく時なのではないかと思えます。これだけ一生懸命おやりになって、押しも押されぬ世界に誇れる森になってるわけですから、50年を契機にお考えになったらいいのではないかなというのが、今日の私のメッセージです。

もう一つ私、どうしても言いたいことがあります。私は学術ですから、さっき報告書のことを非常に素晴らしいと言いましたが、やはり、がっちりとしたものは基本です。

先ほど、ウィーンのホームページを、お見せしましたが、ベルリンもそうです。都市計画の基礎にビオトープマップというのがあるんです。生態系の基本をきちんと調査をして公表しています。生物生息地の情報が、まちづくりの基礎となっています。

自然環境の基本的なビオトープマップ、これはヨーロッパ全体で作ってます。日本でも一時つくろうという気運が高まりましたが、日本の場合にはうまくいっていません。

都市計画に役に立つようなビオトープマップ。それはやはり、基本的には植生です。帯広市は、広大な台地があり、段丘崖があったり、湿地があったり、基本的なものが揃ってますから、ちょっと工夫すれば、できると思います。

ビオトープマップをベースに、これからの都市のマネジメントとして、活用していくことが大事です。日本では、まだどこも作っていません。鎌倉で私は30年やりましたが、これが詳しくすぎて、活用することが困難なのです。

帯広の森でこれだけのものがあれば、私は多分できると思います。

山田さん)

ありがとうございます。ビオトープマップ、イメージとしては分かるし、帯広市に作ったような記憶がないわけじゃないんですけど、ただし、先生がイメージされているものと僕がイメージしてるものは違うかもしれません。ただ、ビオトープという名前ではなかったような気もするんですけど、例えば、帯広も段丘平野の下の方にあるもんですから、湧き水の出る箇所が何か所かありまして、そこで今でも緑地が大山緑地とか3つ4つ残ってるんですね。

石川先生)

湧き水ってとても大事で、要するにビオトープマップというのはお手本があるわけじゃなくて、その場所、その場所で大事なものを選べばいいわけです。ですから不思議ですよ。ベルリンなんか、大きな森はもちろんはっていますが、生垣とか、そういったものがビオトープマップにはっています。例えば帯広なら、湧水地のビオトープ、そのところはきちんと入れ、町のその特徴に合わせて作ればいいわけです。

山田さん)

ありがとうございます。ただし、一つはつぶれてなくなっちゃいました。学校が建ってます。小学校が。

石川先生)

かつてあったというところは、大事です。過去に存在した湧水の位置を明示することは重要です。

山田さん)

実は今、ビオトープの話を先生の方に振ったわけでもないし、お願いしたのはですね、帯広十勝という1万800平方キロという分水嶺で出来上がった地域です。要するに水が大事なことは皆さんご承知の通りだと思うんですけど、水のヨーイドンで出発点からですね、海に行くまでが。

我が十勝は十勝川水系で成り立っています。大樹町、広尾町は歴舟川、広尾川とかありますけれども、基本的には十勝は十勝川という分水嶺から流れたところが我が地域なわけです。問題は、この地域経営の戦略って、帯広の森があるにしても、帯広市がどう個性を出すかにしてもですね、やっぱり地域経営の戦略的な視点というのが非常に大事だろうと思ってます。

ありがたいことに日高山脈が国立公園に指定されま

した。大雪山もあります。阿寒もあります。道立公園も一部含んでますけれども、白糠丘陵という山に囲まれた地域が我が地域なわけです。この中で特に近代的田園都市こそ、これを私なりに理解していけばですね、あの当時、昭和30年代は確かに人口が急増してきました。

その時、街も人もどんどん膨れ上がって行って、小学校が足りなくなって、それで小学校を急遽作らなきゃならないってということで、自衛隊の下にある小学校を作りましたというようなところが、しょっちゅうありました。その中で帯広市、当時の吉村市長がですね、辺境の大地という言い方はおかしいですけど、あの頃の物流はまだ鉄道が主体でした。

高速道路なんて夢にもない話は国中そうでしたから。その中でなおかつ峠で通れるのは、狩勝峠しかなかった時代です。あとは釧路の方に行く道と、日高から抜けていく海沿いの道ですね。道路でつながるのは。とにかく鉄道も国道も狩勝峠しかないという地域だったわけです。

そんな辺境の地で何があるのかということを吉村市長はだいぶ考えられておりました。その中から苦肉の策ではなくて、これは恵まれた地域なのか、恵まれてない地域なのか、今は評価の分かれるところですけど、じゃあそれならば近代的田園都市という、いわゆる十勝の風土に合った、今は畑作地区ですけど、当時はまだお米も作ってました。

農業を主体にした地域づくりをやろうと。その中核として我が帯広が行こうと。なおかつここでもう1点押さえなきゃならないことは、北海道は亜寒帯にあるということでありまして。亜寒帯の主たる意味は、今村さんは先程言いましたけど、冬になったら寒いですよ。雪降りますよね。僕らの小さい頃はマイナス35度ぐらいまで下がりましたから、夏は35度ぐらいあった。1年間で70度の温度差のある我が地域であります。そしてなおかつ年間降雨量は当時はまだ700ミリ前後でした。昭和30年代、40年代は、そして日本全体では2000ミリ、1700から2000ミリぐらいあって、湿潤温暖な地域で米作を中心にした農業っていうのがベースでありました。

それが昭和40年代後半からですね、農業基本法の改定もありまして。コメだけではなくて、畑作酪農の評価もきちっとしていこうということで、農業全般となってきたわけです。そういう限られた地域の中でどう生きていけばいいのかという話を吉村さんはされて

おられました。そこから出てきたのが、近代的田園都市構想 20 万都市論です。

これは全く別の話になっちゃいますけれども、今から 30 年ぐらい前に京都大学の上田篤さんという建築学で社会学をやられた教授がですね、人口論を唱えたことがあります。最適人口は 30 万人だっていうんですよね。その地域の広さではなくて、その地域と言われるのが 30 万人が一番適切だと。

どうしてなのか。私も 77 年生きてきて分かったんですけれども、初めてお会いしました今村さんとちょっと話をしました。そうしたら、金清さんが仲間だったんですとか、石川さんのお友達だったんですということが話のついでに出てくる場合があります。

要するに、30 万人というのは、非常に分かりやすく言えば、人と人の繋がりが良くても悪くても繋がっていく地域だっていうことです。そしてなおかつ、これは集落と違いますから、日常的に常に見られてるとか、日常的に常に地域の中にだとか、そういう窮屈なものではありません。何かあった時に何か会って話した時に、ああそうか、お前そうだったのかというような、そういう付き合いがあったのかってことが分かる地域です。要するに地域経営の基本というのはですね、僕は人の繋がりとって思ってますから、その人の繋がりにってというのがどうあったらいいのかなってというのが、やっぱり帯広という町の中で帯広と帯広の森を考えてる時に、大事な一つの流れのポイントになるんじゃないかなっていうふうにも思っています。

そんな流れの中でですね、ここでもう一度金清さんをお願いしたいんですけれども、金清さん、成人になって、先程自己紹介を含めてこっちへ来られて、帯広の森にうまい具合に関わることが出来たと。僕らがお願いしたような経緯もあるんですけれども、そんな中でですね、ここで商売をやられていて、なおかつ今は東京にお住まいですけれども、子供もここで育てられてですね、そういうことを含めて十勝という地域を、その金清さんのご商売を通してどんなような楽しみと苦しみみたいなのを感じましたか。

金清さん)

十勝の話を随分されたので、僕がするかというところはありますけども、ランドスケープという私どものプロフェッションから考えるということが、実は今、十勝に限らず全国の地方都市ですごく、求められている。都市計画の中の一分野としての緑地とかというこ

とよりも、もう少し、例えばその街のプライド、誇りであるとか、シンボルであるとか、何かもっと精神的な拠り所を期待するものとして緑に絡むことが期待されているようになっていて、そういうふうな問いかけ。何とかならないかというようなことを我々の仕事の仲間に問われることが多くなってきていますね。十勝は何て言うんだろう、その吉村市長の時に、グリーンベルトというのもしっかり考えられて、都市はスプロールさせないという、しかも畑にしたところをまた森に戻すというすごい提案をされていて、それで今 50 年経って森になってきたと。

私たち、これから 50 年、100 年に向かってもっとそれを、質を上げていくとかっていうだけじゃなくて、何かできることはあるんじゃないかって、今日ここに来て考えていたんですけども、今日作ってもらった地図があるじゃないですか。大きくなって、その上を歩けるようになってるやつ。

グリーンベルトって横につなぐ。それって市民生活から言うと、出会うチャンスがそんなに多くはなくて、街から外へ横断していく時にちょこっと通るんだけど、その時には森の実感ってあまり感じないと思うんです。あの地図を見ていると、川とかいろんなものがまちの中に刺さっていく。

まちの外から日高の方から繋がってくるというような。それはグリーンベルトに対してウェッジ（楔のこと）っていうんですけど、楔をまちの中にどれだけ打ち込むかっていうのが、多分計画者としてはすごく重要なことかなと。そうすると、もっと普段の生活とより近い緑の関係、せっかくすごくできている、しっかりできつつある緑と市民の関係をもっと近くにできる可能性があって。

あの地図はうちの赤嶺が作ったみたいですけど、だいぶ脚色があって都合よく作られているから、ちょっとそういう楔が強く見える、実際よりも強く見えてると思うんですけど。さらにあれを今よりももっと強めていくようなことをこれから 50 年めがけてやると、まちは本当にすごく誇れるものになる。ちゃんとした田園都市が出来上がるのではないかと思います。

山田さん)

その楔を打つということ、もう少し詳しくお話しいただけませんか。そういうふうになると意味が全く違ってくると思うので、ぜひその辺のお話を聞かせてください。

金清さん)

ベルトってぐるっと囲むようにあるじゃないですか。地図より内側に。

もともと十勝川と札内川はこのまちを囲むように外側にベルトを通すという計画です。そこにこっち方向に川が入ってたり、帯広川とか売買川とかいろいろ川がありますけども、これをしっかりとしたその緑地として、市内でこの緑ヶ丘公園とかもそうですし、そういうのをもっとまちの中に展開していくと、人との触れ合う、住んでいるところから近いところで緑に触れ合えて、それがそのまま帯広の森にもつながっていく。

それは生物的にも連続していくだろうというようなことです。ベルトって、なんかすごく力強そうなんですけど、ベルトよりも実はこっちのくさびの方が街にとっては効果的なんです。だからこれから50年かけてくさびをいっぱい作っていったらどうですかっていう、そういう話でした。

山田さん)

ありがとうございます。

石川先生)

今の話はものすごく大事です。グリーンベルトという言葉は、1944年にイギリスのロンドンがドイツ軍から爆撃されて戦災復興計画の中で生まれてきた概念です。都市の膨張を防ぐために緑で制御する。

金清様のお話は、そこにくさびをいれていくという重要な提言です。その基礎となるものが、土地の自然環境、水、湧水も含めて、地質等を総合化したものが、先ほどのビオトープマップなんです。

この基礎となる図面を赤嶺さんが作成してくださいました。これがあればもっと細かくできると私は思っています。はじめの一步で、ものすごく良い図面を作っていただいたと思っています。小さな小川、普通はこういう十勝川の雄大なものに比べたら、小川なんて図面に入らないですよ。でも、そこに暮らす人にとっては、小さな川とか湧水とか、それから独立木とかが大事なのです。

それから緑ヶ丘公園、心配で心配で夜も眠れないぐらいです。正直言いますと、皆さん、市民の方がしっかりしていないとだめですよ。緑ヶ丘公園は、ビオトープマップつくれば、随分、大事さが、わかると思います。水があったり、湧水があったり、公園の潜在的力を理解することができます。

いまは、発信していくことが重要であると思います。逆輸出っていうんですか、それが帯広のまちの誇りにつながるし、プライド・オブ・プレイスですね。自分の生まれたところに誇りが持てる、そのために心を砕く。それが、帯広では、できると思います。

山田さん)

ありがとうございます。

時間がなくなってきたものですから、先へ進めたいと思います。今のビオトープの話ですけれども、ありがたいことに、街の中を流れている2本の川は売買川と帯広川、これは過去は何回か洪水を起こしたことがあるんですよ。

それは今、売買川は札内川に、それから帯広川は十勝川に放水路ができて、水量調整が市街化区域の中で調整できるようになっています。ということは、今帯広神社の横に流れている帯広川、これはちょっと上流に行くと帯広の森の中を流れていますから、帯広の森のところの帯広川はまだ放水路はありませんから、その下流側ですから。

ですから、今言われた新しいまちづくり、ビオトープ、何だろうなと思っていたんですけども、まちづくりの中で、単に帯広の森だけじゃないよっていうようなニュアンスでもないと思うんですけども、帯広の森っていう名前もネーミングを変えたらいかがですか、考えてみたらいかがですか。

これも一つの刺激だろうと思います。結果として帯広の森公園になるかもしれないけれども、じゃ、みんな帯広の森のネーミング考えてみようや。何かおもしろい、横文字は嫌だけれども、漢字だったらいいよという人がいるかもしれない。そんなようなところの辺ができてくると面白いなって、今聞いていて思いました。

ということは、話を戻せばですね、帯広川も売買川も我々のためにもっと有効利用ができる。単に排水路じゃない、川だよっていうことを今言ってくれたような気がします。その辺でどう緑地を作っていくのがいいのか。

緑地というわけじゃないですけども、どう、市民が遊べれるような川を作っていけばいいのか。それから、ありがたいことに帯広市は先ほど明治17年にも開拓史の段階で都市計画図が一回出来上がってるわけですから、その時、格子状の20間道路、10間道路で本通り、中通りがはっきりしてまして、帯広市内の旧市街

地という言い方をしたら怒られちゃいますけれども、かなりの部分は都市計画区域の中のかかなりの部分がですね、本通りと言われているところはたいてい街路樹が入ってます。

その街路樹がいろいろクレームの対象になることもあるし、何かあった時に、もう古くなったりもあるから危険な場所もないわけじゃないですけども、それもありがたいことに、この木でなきゃだめだっという決まり方は、歴代市長といひましようか、歴代部長といひましようか、歴代課長といひましようか、その時の流れっていうわけじゃないけれども、その時手に入りやすい木なのかもしないし、担当者の好きだった木かもしないし、色んな木が入っています。

トチノキがあつたりですね、それから、マツはあんまりないですね。基本的に広葉樹が多い。そういう街路樹が帯広の中にたくさんあつて、本通りにほとんど入ってます。

ですから、人の住むところから、この市街化区域というのは帯広市だけではないわけですけども、日高山脈までは帯広市で、帯広市の中に国立公園がどかんとでかいがあるんですけども、それはちょっと今の話がそぐわないので、とりあえず都市計画区域という中で見ていったときに、この十勝19市町村の一番いいところにあるわけです。

オベリベリってのが、アイヌ語で言えば川の集まる場所という意味ですから、その川が集まる場所に人が集まりやすいのも事実なわけですから、次なる可能性としてビオトープという一つのテーマをいただきながら、我々は新しい帯広の森のありようを考えていく時期なのかなと思っています。

さきほどワークショップのポストイットを眺めていたらですね、水あそびのことを言われている方が何人かいらしたようです。今、帯広の森はですね、残念ながら農業用の排水路という形での小川のような川はありますが、残念ながら川という名前の水はありません。

後々、これも考えようですね、もうちょっと帯広川の方から水をいただきましよう。そしてまたそれを元に戻しますよと。ただし、これは金がかかります。それから、先ほどどこかのワークショップのチームで言ったけれども、何かチームじゃなかった、金清さんに言われたのか。道路がですね、栄通りで切られているんじゃないかということを指摘されました。

西帯広ニュータウンから大空団地に上がって運動施設に行く。あの道ですね、例えば人道橋を渡すとか、今そのために過去、大空団地の方々が、エゾリスが我が団地の中に遊びに来て、帰った時に随分車に轢かれてると、そんなような話が出ていました。今、実態としてこの間、私共もワークショップをやっている時にエゾリスが潰されていました。別にエゾリスのためのまちづくりをするわけじゃないんですけども、そんなところも見ていくと、何かまだ目先でやることを課題としてやっていくこと、そして何よりも50年後という大きな夢を持っていこうということですから、今日ワークショップで出された課題というのはですね、我々市民に関わる動きの課題っていうのが非常に大きなものが、結果として施設とか何とかって言いましてけれども、やはり市民一人一人の普段の行いと心持ちがですね、いろんな形で影響してくるんじゃないのかなと思います。

これは帯広市民全員に考えてくれという意味じゃなくても、僕はいいと思っています。関心のある人は一生懸命やろうじゃないかと。先程のワークショップの第1グループで、高校生がもう少し子どもの小学校とお父さん、お母さんの間に入って、何かやれることがあるんじゃないかっていうようなことの提案がありました。

別にそれを組織だってやる必要はないですが、ありがたいことに今、帯広の森ははぐくむという施設があります。そこの中に日月くんをはじめとして優秀なスタッフが揃ってます。そういうところへ相談していくとですね、またさらにいろんな繋がり、それからいわゆる市民が利用するための公園としてのものが一番の声なわけですから、もっと新しい夢と希望が出てくるんじゃないのかなと改めて感じたところであります。

時間ぎりぎりですけども、何か今村さんの方から順に最後にこれだけは絶対言いたいということをお願いいたします。

今村さん

はい、そうですね。小さい子どもたちが森で自然の中で遊んだ体験というのが、きっと将来、私自身の子どもの頃もそうでしたし、何かそれが原体験となって、自然のことを愛するというか、大切に思う気持ちにつながっていくというふうに思っているので、そういうことが体験できる場所だということを情報として発

信するとか、なるべく多くの人に足を運んでもらえるような丁寧な活動をこれからもやっていきたいなというふうに思っています。はい、今日はありがとうございました。

金清さん)

さっきちょっと話したことにつながるかもしれせんけれども。

50年経って森の姿が見えるようになってきて、そこでどうやって使うかなというのがちゃんと考えられるステージに来たのかなと。

しっかりした計画があつて今に至っているわけですが、その中で多分いろんな試行錯誤をされて、森がちゃんと育ったところで全部切って何か作ろうとか、なかなか発想しづらいと思う。ちょっとずつ間伐してみたり、入れ替えてみたり、ちょっとずつちよつとずつ変わっていけばいいんだと思うんです。

それが多分、自然の森ではなくて、人が関わる森ですから、そこに住む人が一体どんなふうな思いでその森と接しているかっていうのが、いずれ形になって表れてくる。だから、森を見たら帯広の文化がわかるというか、文化を映す鏡というみたいな形でいずれ見えてくる。

100年後には多分そういう森が帯広の周りには展開しているんだろうなと。今はまだ森の姿をしているだけで、まだ文化とかそういうものまでこう投影されていないというか、反映されてない。これからそういう時代に入っていくんじゃないかなと思っています。

石川先生)

私は何が言いたいかといったら、「市民力」です。すごいと思います。今日、ワークショップやろうと言いだしたのは私なんです。でも、やはり、ワークショップってちょっと心配でした。

しかし、今日はお一人お一人の方がきちんとご自分の意見をおっしゃって、ファシリテーターの方も素晴らしかった。一人一人の皆さんがですね、きちっと問題に正面から向き合って、しかも自由に発言して、お互いにきちつと言いたいことを持ってですね、まとめて発表されて、私はこの力があればどんなことでもできると思います。

やはり嬉しいのは、帯広では、相手の方の顔が見えます。東京にいと分かんないんですよ。顔がみえれば、ヒューマンパワーが生まれると思います。

ありがとうございました。

山田さん)

市長は公務があるにもかかわらず、最後まで残っていただきました。もし市長、何か感想でも結構ですから、何かありましたら一言お願いできれば。

米沢市長)

今日は本当に皆さんどうもご苦労様でした。今、皆さんからお話を伺って、帯広市民の皆さんの持っているパワーですとか、これまでの50年でここに培ってきたといいますか、積んできたパワーといいますか、そういうものも改めて感じさせていただきました。

行政だけでできないことも十分認識しておりますけれども、行政でなければできないこともいっぱい感じております。先生から緑ヶ丘公園の件で随分夜も寝られなくて心配してと言われてましたので、この辺もしっかりと受け止めなくてはいけないなというふうに感じているところです。

社会的共通資本のお話もございました。私、今4期目をやらせていただいていますけれども、4期目の公約には、森とみどり、みどりと一緒に住んでいくまちづくりという形を入れています。先ほどのお話にもありましたけれども、やっぱり我々の文化をこれからどう作っていくか、それが森にちゃんと反映されていくんだと言うお話も、なるほどと思って伺ったところであります。

言いたいことがいっぱいありますけれども、今日はとてもいい時間になりました。ありがとうございました。

山田さん)

市長がここまでいてくれるんだったら、初めからパネラーに入ってもらえばよかったですね。次回からそんなことを心がけながら、今日のシンポジウムをこれで終了したいと思います。どうもありがとうございました。

絵本作成（漫画冊子・写真絵本）

事業概要と目的

子供向け漫画冊子と一般市民向け写真絵本の2本立てとして、本の対象者や活用方法にメリハリをつけ、相互補完的に活用することで、帯広の森への理解と親しみを醸成すること。

なお、本事業の実施にあたり、デザイナーの檜山 知弘氏に携わっていただいた。

漫画冊子

制作者 北海道森林管理局 平田 美紗子 氏

- 北海道森林管理局の職員であり、かつ森林業漫画家として、森林・林業に関するイラストや漫画を多数執筆。
- 本事業の実施にあたり、地域連携事業として北海道森林管理局にご協力をいただいた。

対 象 者	子ども
制作目的	具体的な情報提供や知識解説を織り交ぜながら、帯広の森の歴史や価値をわかりやすく伝えて、思いなどを次世代につないでいく。
活用方法	指定管理者による帯広の森での体験学習としての活用や、小中学校やとかちプラザなどの公共施設への設置のほか、帯広市図書館の電子版による公開など。
規 格 等	B5版 16ページ（表紙・裏表紙込み）

写真絵本

制作者 写真家 写真絵本作家 小寺 卓矢 氏

- 「森のいのち」「いろいろはっぱ」など、森や自然に関する写真絵本を制作。
- 書籍出版のほか、スライドトークショーや写真絵本作りワークショップ、学校や公共図書館での写真体験プロジェクト指導など幅広く活動されている。

対 象 者	一般市民
制作目的	帯広の森が担う普遍的意義や森林生態系そのものが持つ存在価値を、より感覚的・抽象的・情緒的に伝える。
活用方法	保育所、幼稚園、小中学校や帯広市図書館等の公共施設への設置や、帯広の森での森林体験事業等での導入や動機付けなど
規 格 等	AB版 32頁（本文）



目 的

帯広の森の認知度や利用状況のほか、どのように過ごしたいのかなどの市民ニーズを収集し、今後の整備や利活用等を考える上での基礎データとすることを目的としている。

調査対象と方法

アンケートに関するチラシを、帯広の森・はぐくむや体育施設のほか、図書館やとかちプラザなどの公共施設、中学校や高等学校に配布し、web や用紙により回答してもらうこととした。また、帯広市 HP や帯広市公式 LINE でも周知し、帯広市民に限定せず幅広く調査を行った。期間は、令和 6 年 8 月 6 日から令和 6 年 10 月 15 日までとした。(回答数：1,061 人)

調査項目と内容

帯広の森の利用に関することや、これからの森での過ごし方などの 21 項目を設定した。質問内容の詳細、回答は以下のとおり。

調査結果の概要及び考察

(1) 回答数 1,061 人 (web 1,061 人、用紙 0 人)

(2) 回答者の属性

回答者の居住地は、帯広市内が 929 人 (約 88%)、帯広市外が 132 人 (約 12%) となった。

なお、回答者の年齢割合は図 1 のとおりとなった。

(3) 帯広の森に関する事柄で知っていること

【あなたが「帯広の森」に関する事柄で知っているものを選んでください。】という質問について、3 つまで当てはまるものを選択、回答してもらった。結果は表 1 のとおりで、「帯広の森」に関して知っているものは、多いものから順に「体育施設」が 905 人、「はぐくむ」が 598 人、「市民の森」が 490 人であった。

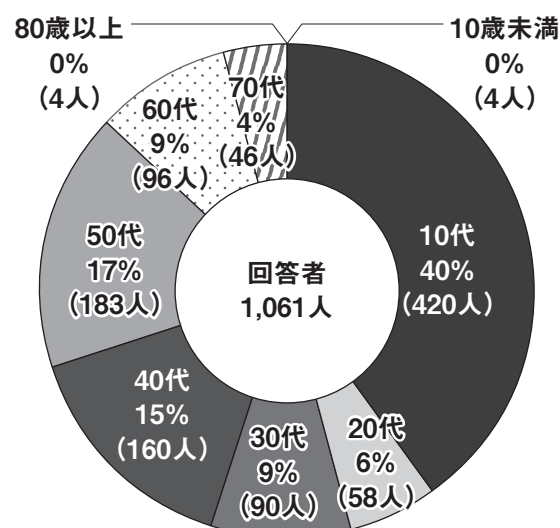
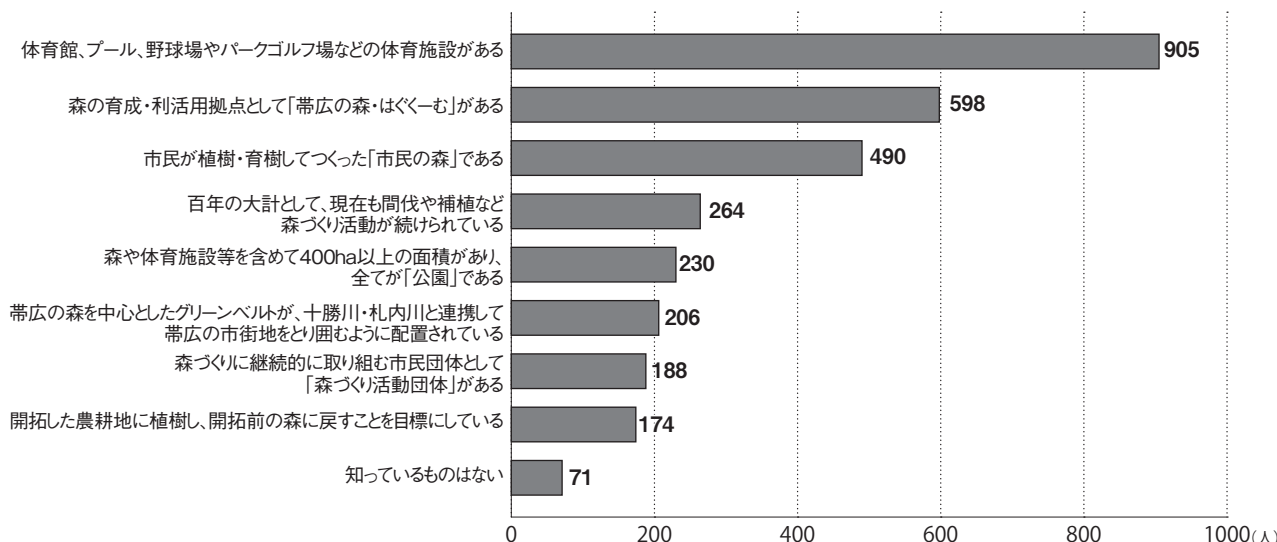


図1：年齢

表1：知っているもの



帯広の森の認識としての多くが「体育施設」である一方で、育成や利活用の拠点施設である「帯広の森・はぐくむ」や、「市民の森」であることを認識している人も一定数いるため、市民植樹祭などの市民協働の取組みのほか、帯広市や指定管理者のこれまでの活動が、そういった施設の存在を認知させることにつながったと考えられる。

(4) 「帯広の森」の好きなところ、好きな理由

【あなたは「帯広の森」のどこが好きですか。】また、【好きな理由を教えてください。】という質問について、自由記述で回答してもらった。

表2：好きなところ、好きな理由

好きなところ	人 数	理 由
自然が豊か、緑が多い、 動物、木、野鳥、草花、虫 など	291	自然がいっぱいだから 自然の中にスポーツ施設があるから リス等の動物が見られるから 身近に自然を感じられるから 静かでゆったりしていて心が落ち着くから 歩くだけで自然を感じられるから 空気が綺麗だから 広大だから
スポーツ施設が沢山あること、 プール、オーバル、野球場、 アイスアリーナ、サッカー場、 陸上競技場、体育館、弓道場、 テニスコート、パークゴルフ場、 研修センター など	279	スポーツ施設が綺麗に整備されていて使いやすいから 色んなスポーツができる又は観戦できるから 大規模な大会が開催されているから 子供がスポーツ施設を利用しているから 学生時代の思い出があるから 自然に囲まれて気持ち良くプレー出来るから
風景、もりの山 など	68	自然や緑が綺麗だから もりの山から市街地や日高山脈を一望出来るから 自然と都市の一体感があるから
特に無い、行ったことがない など	43	行ったことがないのでわからない
散策路、遊歩道 など	32	歩きやすいから 自然を楽しみながらウォーキングができるから
四季折々の景色 など	31	花、緑、紅葉、雪景色など色々な景色が見られるから
はぐくむ	24	様々な体験イベントに参加出来るから 子供が利用出来るから
その他 森の交流館、JICA、ぱわっく 帯広の森の成り立ちや構想 など	90	色々な施設が集まっているから
合 計	858	

前述の(3) 帯広の森に関する事柄で知っていることの回答では、「体育施設」が一番多かったが、帯広の森の好きなところでは「体育施設」よりも「自然が豊か、緑が多い、動物、木、野鳥、草花、虫など」が一番多く、自然の豊かさが帯広の森の魅力になっていることがわかった。

(5)「帯広の森」利用について

【あなたは「帯広の森」を利用しますか。】という質問について、当てはまるものを選択、回答してもらった。

結果は図2のとおりで、「利用している」が491人（約46%）、「過去に利用したことはあるが、今は利用していない」が405人（約38%）、「全く利用していない」が165人（約16%）となった。

現在、利用していない方々が半数を以上を占めており、帯広の森を利用しなくなった理由を把握することで、今後の利活用促進に向けた検討に活用できるものと考える。

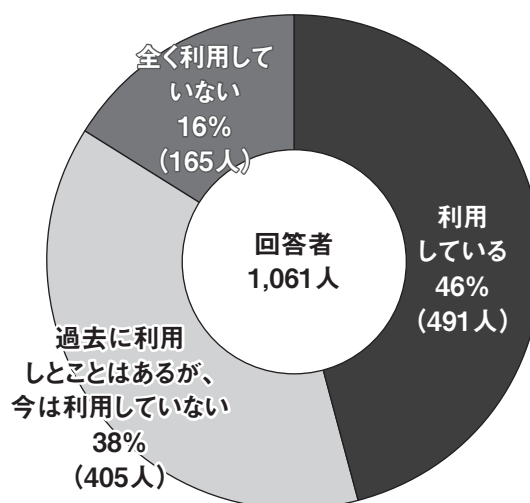
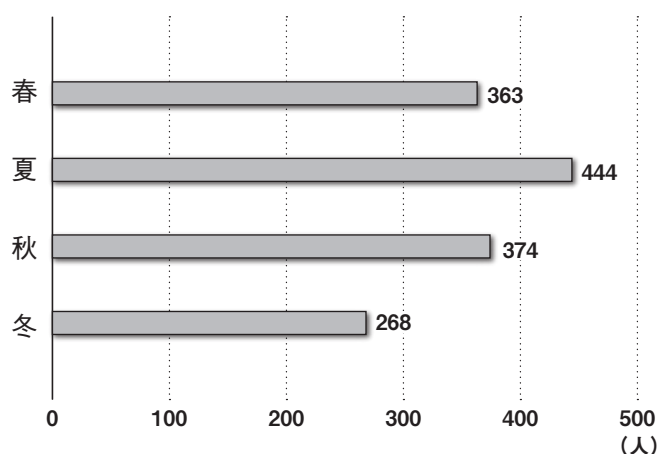


図2: 利用状況

(6) 帯広の森を利用する季節

表3: 利用する季節



【帯広の森をどの季節に利用しますか。】という質問について、当てはまるものを全て選択、回答してもらった。

結果は表3のとおりで、前述の(5)【あなたは「帯広の森」を利用しますか。】で「利用している」と答えた491人（以下、利用している人）が利用する季節は、夏（444人）が最も多く、続いて秋（374人）、春（363人）、冬（268人）となっており、夏場の利用が多い傾向ではあるが、1年を通じて利用されていることがわかった。

(7) 利用頻度

【どれくらいの頻度で帯広の森を利用しますか。】という質問について、当てはまるものを選択、回答してもらった。

結果は図3のとおりで、利用している人のうち、利用頻度は多いものから順に「月に数回」が291人（約59%）、「週1～2回」が72人（約15%）、「ほぼ毎日」が70人（約14%）、「週3～5回」が58人（約12%）となった。

「ほぼ毎日」、「週3～5回」が4分の1を占めており、利用されている方は、日常生活の一部として利用されていることがわかった。

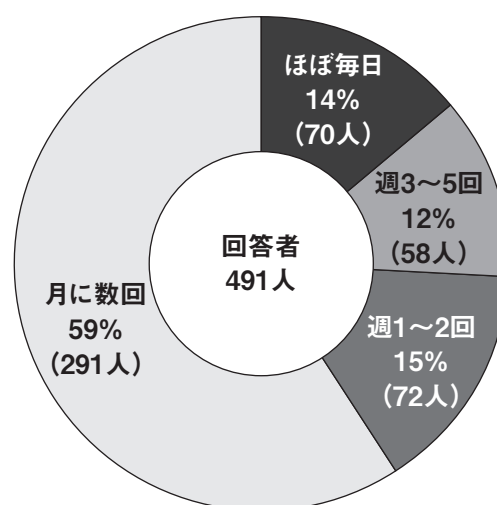


図3: 利用頻度

(8) 利用する時間帯

【主に何時ごろに利用しますか。】という質問について、当てはまるものを選択、回答してもらった。

結果は図4のとおりで、利用している人のうち、利用時間は多いものから順に「9～12時」が142人（約29%）、「15～18時」が125人（約25%）となっており、1日を通じて満遍なく利用されている。

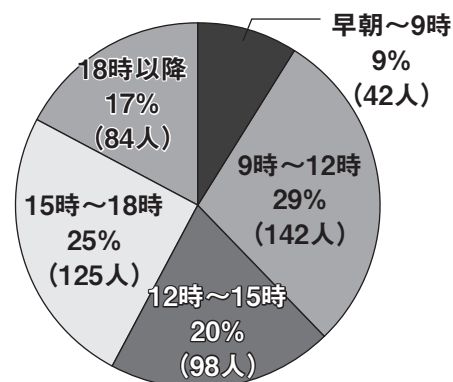


図4: 利用時間

(9) 移動手段

【どのような手段で帯広の森に来ますか。】という質問について、当てはまるものを選択、回答してもらった。

結果は図5のとおりで、利用している人のうち、移動手段は多いものから順に「乗用車（レンタカー含む）」が277人（約56%）、「自転車」が172人（約35%）と、乗用車と自転車だけで9割以上を占めており、これら以外の移動手段の確保が課題であることがわかった。

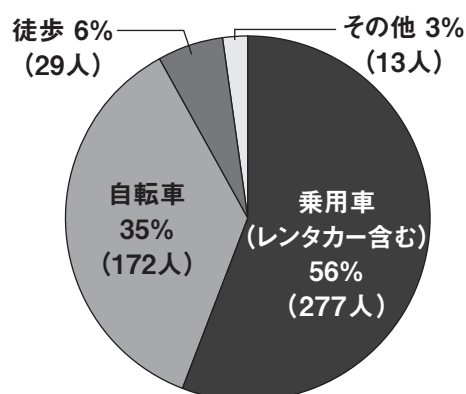


図5: 移動手段

(10) 誰と利用するか

【主に誰と利用しますか。】という質問について、当てはまるものを選択、回答してもらった。

結果は図6のとおりで、利用している人のうち、誰と利用するかは多いものから順に「部活・サークル仲間」が192人（約39%）、「子供」が80人（約16%）、「ひとり」が69人（約14%）となっており、回答者の4割が10代を占めていることもあり、体育施設を利用する「部活・サークル仲間」が4割程度となっている。

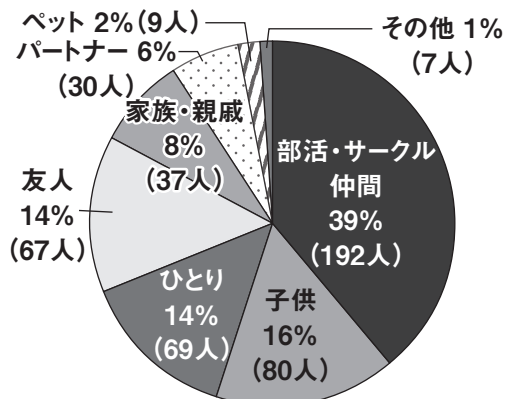


図6: 誰と利用するか

(11) 滞在時間

【1回の利用でどれくらい滞在しますか。】という質問について、当てはまるものを選択、回答してもらった。

結果は図7のとおりで、利用している人のうち、滞在時間は多いものから順に「1時間～3時間」が313人（約64%）、「30分～1時間」が78人（約16%）、「3時間～5時間」が66人（約13%）となっており、3時間以内の利用が8割以上を占めている。

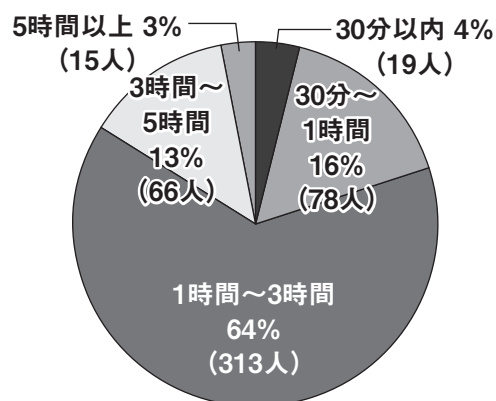


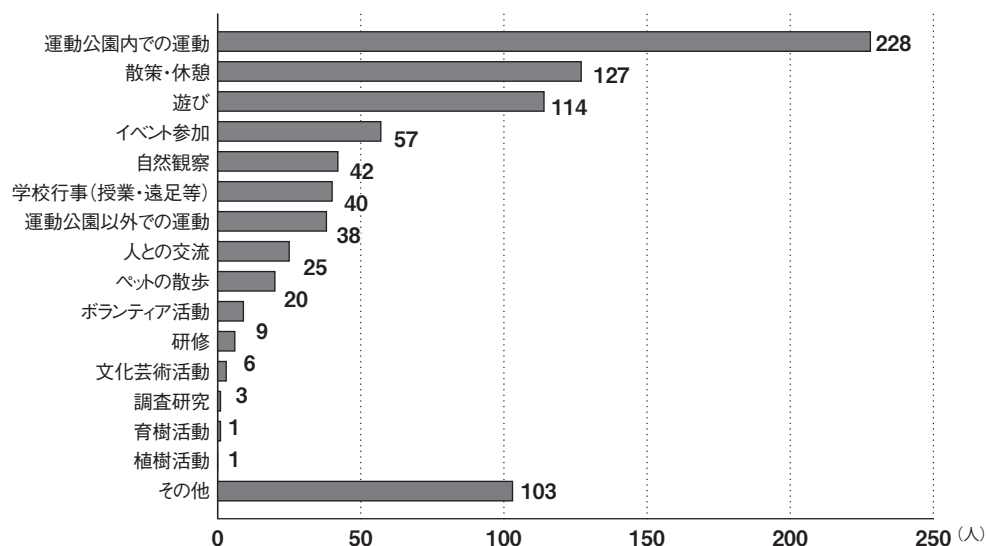
図7: 滞在時間

(12) 利用する主な目的

【帯広の森を利用する主な目的を教えてください。】という質問について、3つまで当てはまるものを選択、回答してもらった。

結果は表4のとおりで、利用している人の利用目的は、多いものから順に「運動公園内での運動」が228人、「散策・休憩」が127人、「遊び」が114人となっており、運動公園内での運動が最も多くなっている一方で、散策・休憩や遊びなども一定数いることや、それ以外の利用目的もあり、多様な目的で利用されていることがわかった。

表4:利用目的

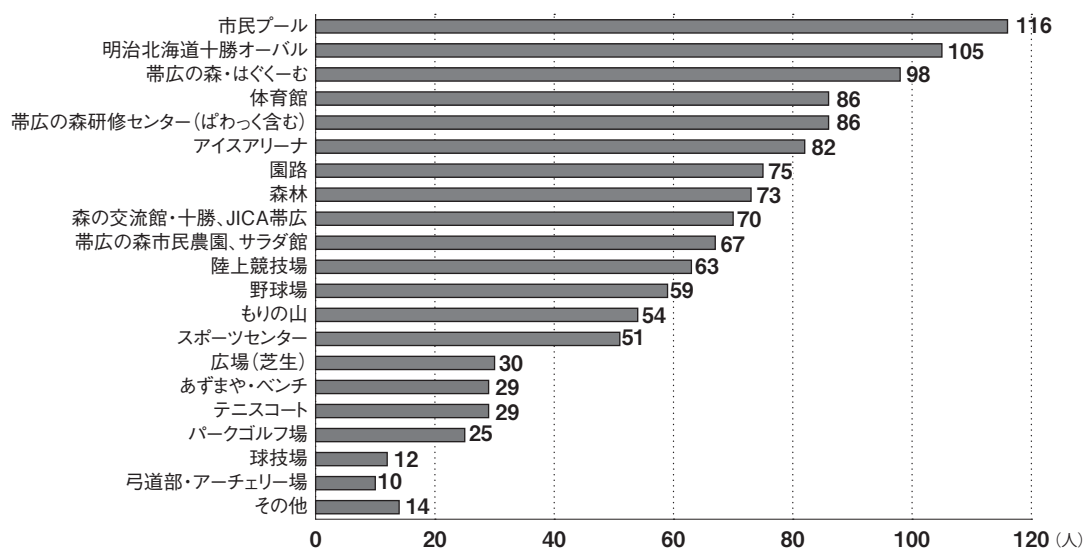


(13) 利用する施設

【主にどの施設を利用しますか。】という質問について、当てはまるものを全て選択、回答してもらった。

結果は表5のとおりで、利用する施設は、多いものから順に「市民プール」が116人、「明治北海道十勝オーバル」が105人、「帯広の森・はぐくむ」が98人となった。

表5:利用する施設



前述の(3)【あなたが「帯広の森」に関する事柄で知っているものを選んでください。】で得られた回答と同様に、運動公園内の施設利用が上位を占めている。一方で、帯広の森の拠点施設である帯広の森・はぐくむも同水準で利用されている。

これは、前述の利用目的である散策・休憩、遊び、イベント参加、自然観察などが、帯広の森・はぐくむの利用につながっているものと考えられる。

(14) 満足度

【帯広の森について満足度を教えてください。】という質問について、当てはまるものを選択、回答してもらい、また、【上記の満足度の理由を教えてください。】という質問について、自由記述で回答してもらった。

結果は表6のとおりで、6割程度の人が「満足」、「やや満足」と回答している一方で、帯広の森に行ったことがない等の理由から3割程度の人が「普通」となっている。

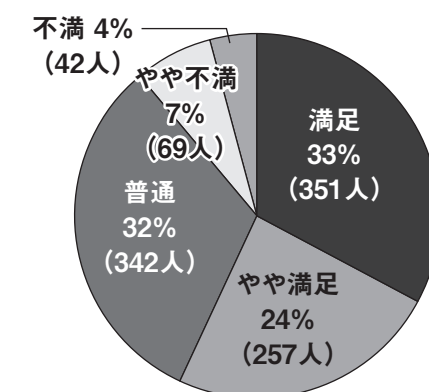


図8: 満足度

表6: 満足度

満足度	人数	理由
満足	351 (33%)	悪いところがない、きれい、広い 利用しやすい、心が安らぐ 気持ち良くスポーツができる 色んなスポーツをしたり観戦できる スポーツ施設が綺麗に整備されていて使いやすい 駐車場が広い 自然が豊か
やや満足	257 (24%)	施設が綺麗、施設が古い 利用しやすい、普段利用しない人にはわかりにくい 色んなスポーツ施設が揃っている 自然が豊か、虫がいる 近い、遠い
普通	342 (32%)	スポーツ施設があることしか知らない 行ったことがないからわからない、利用しない 最近は行っていない 良くも悪くもない 遠い、交通の便が悪い 何があるのかわかりにくい 施設が老朽化している
やや不満	69 (7%)	施設が古い、子どもの遊び場が無い、駐車場が足りない 空調等の設備に不満、各施設への入口がわかりづらい 遠い、自家用車がないと行けない、バスの便が少ない 色んな施設があるが入りづらい スポーツ施設では団体利用者が多くて個人で使いにくい スポーツ施設しか知らない、利用の仕方がわからない
不満	42 (4%)	遠い、森の手入れが悪い 利用していない、帯広の森のことがわからない
合計	1,061	

(15) 利用しない理由

【帯広の森を利用しない理由を教えてください。】という質問について、当てはまるものを選択、回答してもらった。

結果は図9のとおりで、前述の(5)【あなたは「帯広の森」を利用しますか。】で「過去に利用したことはあるが、今は利用していない」または「全く利用していない」と答えた570人のうち、利用しない理由が多いものから順に「目的がない」が249人(約44%)、「場所が遠い」が114人(約20%)、「時間がない」が73人(約13%)となった。

目的がないが4割以上を占めており、帯広の森が持つ様々な魅力の向上や情報発信ができていないことが1つの要因であると考えられる。

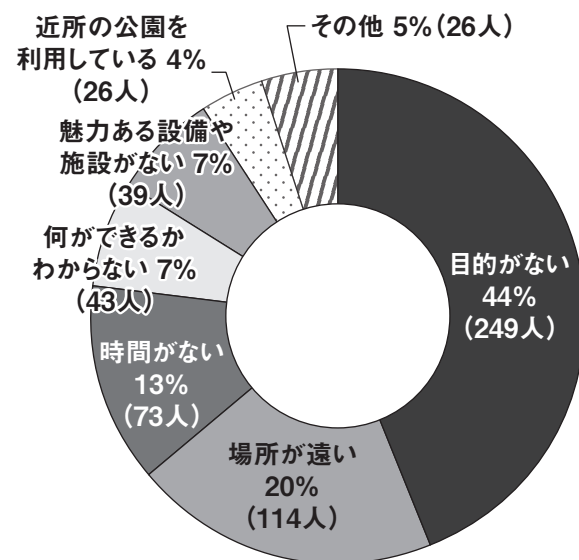


図9: 利用しない理由

(16) どのように過ごせたら楽しいか、またはやってみたいことはあるか。そのためには何が必要か

【あなたは、帯広の森でどのように過ごせたら楽しいと思いますか。または、やってみたいことはありますか。】、また、【上記の過ごし方・活動をするにあたって、必要なものは何ですか。】という質問について、自由記述で回答してもらった。

結果は、表7に9つの要素別にとりまとめた。帯広の森での過ごし方、やってみたいこととして、運動や遊び、ゆっくりのんびり過ごす、飲食などが多くあったほか、そのために必要なものとして、カフェやレストラン、遊具、キャンプ場などの施設、トイレやベンチなどのインフラ施設を求める声が多くあることがわかった。

表7: 過ごし方、やってみたいこと、必要なもの

要素1	ゆっくり、のんびり、ゆったり など	66人
過ごし方 やってみたい こと	●友達や家族と気軽に行ってゆっくりしたい、喋りたい ●1人で時間を気にせずゆっくり過ごしたい、くつろぎたい ●森の中をゆっくり散策したい ●読書を楽しみたい ●日陰でゆっくりしたい	
必要なもの	●ベンチ ●トイレ ●休憩所、四阿 ●カフェ、レストラン、キッチンカー ●芝生	
要素2	飲食、カフェ など	49人
過ごし方 やってみたい こと	●森の中や見晴らしの良い所にカフェがほしい ●自然の中でお茶や珈琲を飲んだり、おいしいものを食べたい ●家族で楽しめる飲食スペースがほしい ●運動後や散歩の途中で休憩出来る場所がほしい ●とかちマルシェのような食のイベントを開催してほしい	
必要なもの	●カフェ ●レストラン ●キッチンカー ●キャンプ場	
要素3	運動、スポーツ、トレーニング、散歩 など	163人
過ごし方 やってみたい こと	●子どもや犬と一緒に散歩がしたい、のんびり自然散策したい ●ウォーキング、サイクリング ●自然を感じながらスポーツを楽しみたい ●気軽に色々なスポーツを体験したい ●プロの試合を観戦したい	
必要なもの	●カフェ、レストラン、キッチンカー ●遊歩道、園路の整備 ●休憩所、ベンチ、トイレ ●バスなど交通機関 ●コンビニ ●宿泊施設、合宿所	

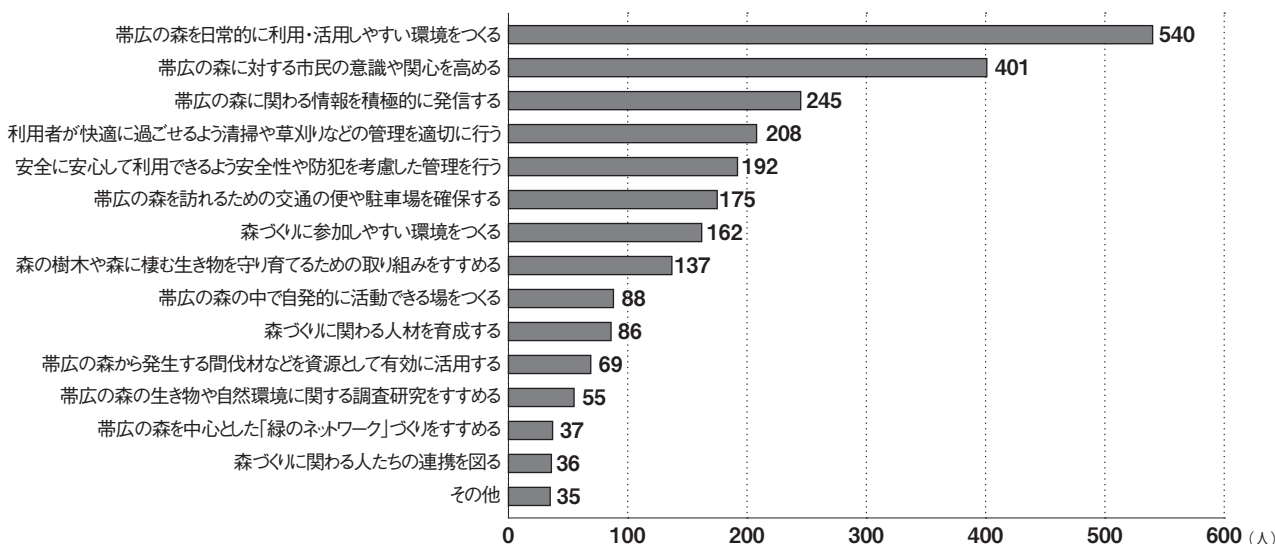
要素 4	自然、動植物 など	61 人
過ごし方 やってみたい こと	●森林浴、自然散策 ●リス、野鳥、昆虫、野草、木、花などを観察したい ●自然や四季を感じてリラックスしたい ●自然を感じながらスポーツを楽しみたい ●子供と一緒に自然の中を歩いたり、遊びたい ●自然の中で飲食したい	
必要なもの	●カフェ、レストラン、キッチンカー ●キャンプ場 ●自然を案内する人、案内図、魅力の発信 ●休憩所、トイレ ●遊歩道の整備	
要素 5	子供、子育て、乳幼児 など	52 人
過ごし方 やってみたい こと	●子供向けのイベントをやってほしい ●乳幼児や未就学児が屋内で安全に遊べる場所がほしい ●子供と一緒に過ごせる場所がほしい ●屋内外にもっと子供向けの施設がほしい ●子供が自然に触れられる空間がほしい	
必要なもの	●カフェ、キッチンカー ●キャンプ場 ●大型遊具、室内遊具、児童会館のような遊具 ●キッズスペース、乳幼児の飲食スペース、涼しい休憩スペース ●バス等の交通機関、トイレ	
要素 6	遊び、遊び場 など	71 人
過ごし方 やってみたい こと	●大人も子供も一緒に遊べる場所がほしい ●レジャー施設がほしい ●水遊びができる場所、冬でも遊べる施設がほしい ●市外にあるような広い公園、屋内遊戯施設が帯広にもほしい ●森のアスレチック、ハンモック、ブランコで遊びたい	
必要なもの	●屋内遊戯施設、屋外遊戯施設 ●大型遊具、木製遊具、木 ●水遊び場、キャンプ場 ●カフェ、キッチンカー ●涼しい場所、飲食スペース	
要素 7	イベント など	49 人
過ごし方 やってみたい こと	●野外音楽フェス ●子供向けのイベント、お祭り、花火 ●とちかマルシェやファーマーズマーケットのような食のイベント ●芸術祭 ●自然を楽しめるイベント ●スポーツのイベント	
必要なもの	●キャンプ場 ●キッチンカー、カフェ ●飲食スペース、休憩スペース ●イベント情報の発信	
要素 8	バーベキュー、キャンプ、ピクニック など	69 人
過ごし方 やってみたい こと	●キャンプ ●バーベキュー ●ピクニック	
必要なもの	●キャンプ場、炊事場、トイレ、コテージ、宿泊所 ●カフェ、レストラン、キッチンカー ●芝生、テントを張るスペース ●テントや焼き台などのレンタル	
要素 9	その他	228 人
過ごし方 やってみたい こと	●ない、わからない ●犬と遊びたい ●交通の便を良くしてほしい、遠い、坂を上るのが大変 ●コンビニ、温泉、サウナがほしい ●施設内を涼しくしてほしい	
必要なもの	●カフェ、レストラン、キッチンカー ●ドッグラン ●交通手段 ●宣伝 ●冷房	

(17) 今後の「帯広の森づくり」に必要な取り組み

【次の50年に向けて、帯広の森の価値や魅力を未来に引き継ぎ、より身近に感じていただける利活用を促進するために、今後の「帯広の森づくり」にどのような取り組みが必要だと思いますか。】という質問で当てはまるものを3つまで選択、回答してもらった。

結果は表8のとおりで、「帯広の森づくり」に必要なと思う取り組みは、多いものから順に「利活用しやすい環境をつくる」が540人、「意識・関心を高める」が401人、「情報を積極的に発信する」が245人となった。

表8: 今後必要な取り組み



必要なインフラ等の整備、帯広の森が持つポテンシャルを市民に知ってもらい関心を持ってもらうこと、そのための情報発信を強化することが必要となることがわかった。

(18) おわりに

本調査から、造成開始から50年を経過する帯広の森の使われ方や利用実態、帯広の森の満足度や必要と思うもの等について基礎データを得ることできた。

現状では、帯広の森に対する認識は「体育施設」が一番であり、帯広の森を利用する人の利用形態もそれに沿ったものが多くある一方で、利活用の拠点施設である「帯広の森・はぐくむ」も一定程度利用されていた。帯広の森を利用しない人は「目的がない」ことが一番の理由となっていたため、今後、四季を通じた自然の魅力や各施設で実施している様々なイベント等の情報発信に加え、必要なインフラ等を整備すること、知ってもらう、利用してもらうといった仕掛けづくりが重要となる。

なお、これらの基礎データは、多くの市民の皆様により一層親しまれる森づくりを進めていくために、今後の森づくりの参考とするものである。

最後に、本アンケート調査の実施に際し、ご協力いただいた方々をはじめ、長年にわたり帯広の森づくりにご協力いただいている市民の皆様にご心より感謝申し上げますとともに、今後ともさらなるご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。